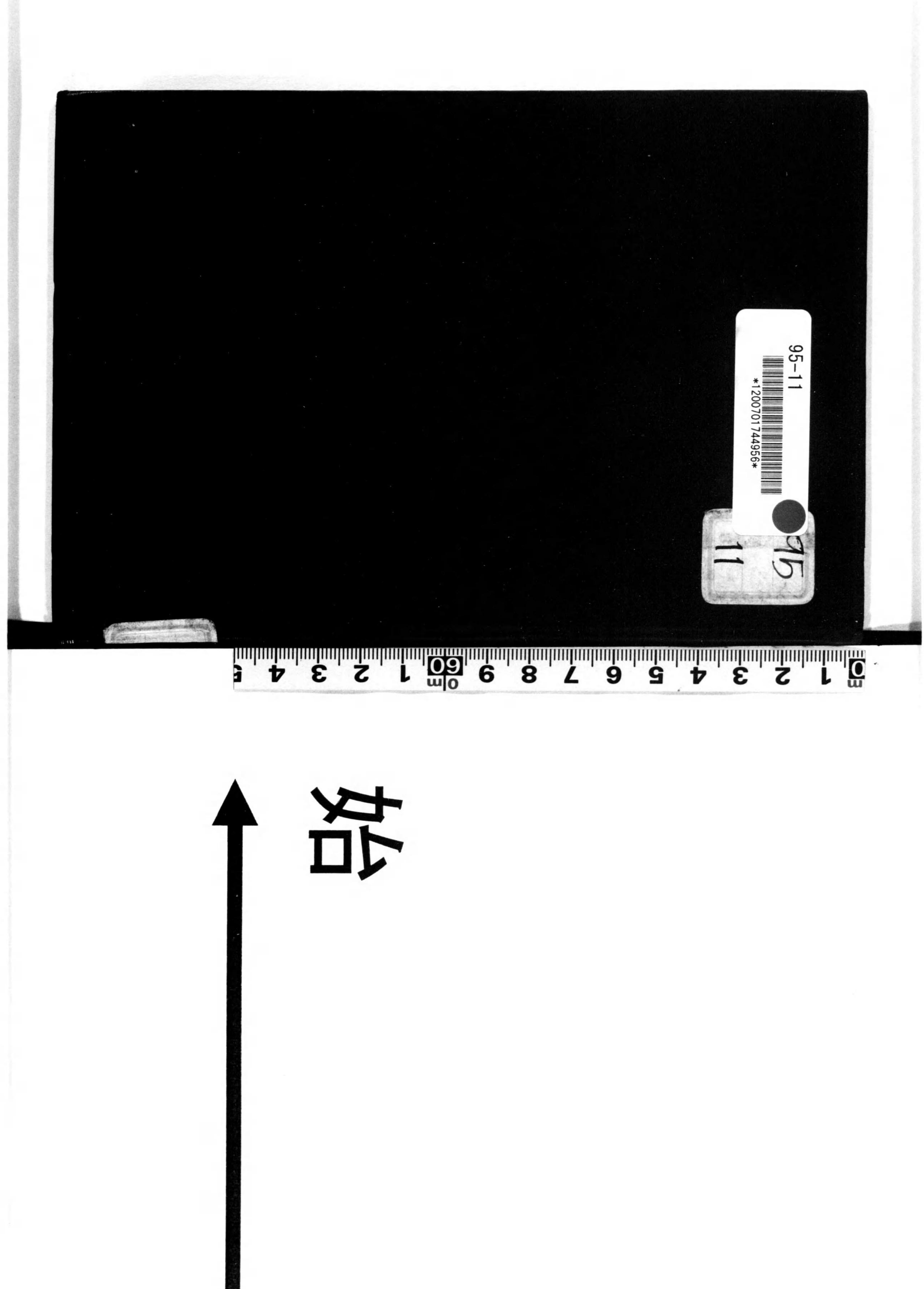
95-11
12007017449 56
95
11
故

文藝叢書

川柳梗概

文藝叢書

川柳概

岐阜井阪良久 著

黄光

金港堂書籍株式會社

緒言

我等の生存する滑稽の天地には、英雄なく君子なく惡人なく美人なし、僞善虛禮の七面倒臭さきなく、嫉妬怨恨の焦つきなし、觀じ來れば天地間の森羅萬象皆滑稽の詩材ならざるなし、況んや裸蟲の名利に苦悶せる俗惡の人間界、何ぞソレ一に滑稽詩材に富めるや、こゝに川柳梗概一卷を草して、世の同好の青年に示す、此書語つて未だ詳かならざる者あり、然れども今上梓に急になどとウマイ遁口上を以て此書の卷頭を汚す者は、武藏の國の住人久良岐入道藤原ヘナ槌

文藝叢書

川柳梗概

阪井久良岐著

一、川柳の講釋始まり〳〵

川柳をカハヤナギと讀んで、番茶の通稱と心得た青年文士の多い今日江戸ッ子生粋の輕文學、水道の水で產湯を遣ッた兄ィさんで無くッちやあ、憚んながら川柳の妙を談ずるに足りないと氣焰を吐いて見ても本屋の番頭に云はせれば、先生當節柄そんなことを仰ッしやッても駄目の皮で、矢張婦人之何々とか、處女罪惡論と云ッたやうな、助平文學でニキビ連を釣り出すか、然らずんば家庭の珍味とか云ッたやうな、他人の臺所で冷飯を御馳走になッて無暗に感ずる飯事文學流の書物か、乃至は細君操縱法の向うを張ッて、宿六操縱法を研究するか、又は濡粟成功談とか不可解天人論と云ッたので無くッちやア、到底ブックメーカ

世の中にか程うるさきものはなし
交武といふて夜もねられず

ーで世渡りは六ッケ敷いもんですよと、云はれて見れば、全くろうだ、何しろ當節の人間中々利口になッて、どうして大枚定價金〇十〇錢なんかと云ふ書物を買はないからね、小説が出れば貸本屋にかけ付け、知人が著述をすればスグ押かけて、一寸拜借一冊頂戴で、到底本屋泣かせに終はるに過ぎない、所がマダ兵隊さんや中學連の正直な所を相手に、文士商賣をヤラカスには、成程助平文學投機文學に、止どめを刺すかも知れぬが、オイラはソイッは御免を蒙らう、苟も川柳を談じやうと云う人間が、川柳先生の所謂淺黄裏文學に從事するは、チットお天道樣にスマねえ次第だからナ、だが今日文壇に缺乏してゐるのは、滑稽趣味だと云うのは、お前も先刻承知之助だらう、所で一ッ今日は、お前を聽衆とも門人とも見立てゝ、僕がこゝで川柳のいかなるものであるか、川柳の今日に革新せねばならぬ必要と云うものを說き聽かしてやらう、若し眠くなッたら勝手に、何所の隅でもかまわないからゴロリとお寢なさ

講釋を始めやうかと、本屋の番頭を前に、いよ〳〵此所川柳の始まり〳〵

二、川柳史の大要 上

ソコで第一に來る疑問は、川柳とは何ぞやと云ふ、イヤに固くるしい、試驗の問題めくがね、川柳はセンリウと呼んで、柄井川柳と云ッた人の點をした狂句が尤流行したに依ッて、狂句を川柳點と呼び、再び略して川柳と云ッたものだ抔は、諸君も先刻合點、川柳の歷史なぞは、近頃柳花生の『川柳難句評釋』を首め、中根先生の『前句源流』武島君の『川柳の變遷及び特質』などいふのに悉く記されてあるから、コイッを一々蒸返しなぞはチット恐れる次第であるが、サテ早世間は廣いもので、餘り獨合點でコレも知ッてるだらうと遠慮すると、一向話が分からない人が多いやうだから、一ッ川柳史なるものゝ大要をザット述べよう、が、僕見たやうなザックバランの人間は、到底史家の材に非らずだから、人樣のお尻についてコチ〳〵詮鑿考證に日を暮らす事が出來ないから、本書の紙數

が減じる患があッても、學者先生ぶる講義はおアヅケとして、何でも端折ッて川柳史の前を驅け足で、前へオイ〳〵

和歌は萬葉が云ふまでもなく其正宗で、この源流から種々分脈せられた、が、雄壯とか典麗とか、優美とか云ふ點は大に發達したけれど、肝心な滑稽の歌は發達しなかッた、尤お公卿樣てふ衣冠束帶なる者は、餘り四角張過ぎて滑稽の趣味に調和しない)ボウ〳〵眉に薄化粧、猫撫聲の『麿が』には適してゐやうが、江戸ッ子流の『眞ッ平でめんねえ』的には、一段と不適當でおりやッた、ソコでどうしても紀貫之藤原定家流の歌人が輩出して鳥羽僧正的の歌人は獨りも出なかッた、併しながら萬葉時代には隨分皮肉な歌人もあッて、萬葉十六の歌なぞになると、

寺々の女餓鬼申さく大神の男餓鬼賜ばりて其子產はむ

なぞと、大神の大將痩せてゐたので、お寺の餓鬼の木像に喩へられて終しまッたこともある、又

勝間田の池は我れ知る蓮無し然か云ふ君が髯無きが如

なぞと、當コスリに髯武者の殿樣にカラカッタ女中なぞもゐたのだ、又

法師等の髯の剃杭に馬繫ぎ甚くな曳きそ法師半無む

なぞと檀那寺の坊主を茶化した先生もあッた、然るに其次ぎの『古今集』時代になると、土臺女の假色を遣ッて國文の開山となる位の貫之君だから、今の何々女史著男子何々論の際物屋と同一視するはチット可愛想だが、到底吾黨の士にあらずで、其俳諧歌なぞは一として見るに足るものが無かッた、ソコで八代集中僅かに『金葉集』が淺薄極まる駄洒落の

卯の花は皆白髮とも見ゆるかな賤の垣根はとしよりにけり

なぞと云う、俊賴朝臣と年寄とをヒッカケた位の洒落を輕妙としてゐたのに過ぎなかッた、が、此集は比較的滑稽趣味に富んでゐるのと、ソレに從來繼歌と唱へて、日本武尊の筑波の連歌より始めて、『萬葉』の家持卿と尼法師の連歌及び『後撰』『拾遺』等にも見えた上句下句を別人で咏み

合うのが、『金葉』になッて始めて連歌と稱せられて、其連歌の收錄されたのも一番に多い、ソレは彼の和泉式部の有名なる連歌

千早振るかみをも足に卷くものかこれをぞしもの社とは云ふ

なぞの類で、其連歌にも優美を主としたものと、滑稽を主としたものが類別されるやうになッた

後世の俳句は此滑稽的連歌から孕胎されたものだが、川柳卽ち狂句の本體たる前句附も、此滑稽的連歌から其分脈をひいてゐるのである

足利時代になッて、和歌は二條冷泉二家の獨擅場となッて、固陋なる法式の下に萎靡殆ど振はず、一方に連歌の變體たる長篇の五十韻百韻などが頗る流行を極めた、が、これは文學として頗る價値のなかッたので、德川時代になッて遂に俳句の爲めに其光を奪はれて終まッた

併し其俳句も最初は、檀林風と云ッて、輕口的の滑稽を交へたものがあッたが、芭蕉一たび出でて、眞面目なる文學趣味の發達を遂げた、その檀

林風なぞも加入して元祿時代に、一種の滑稽文學なる冠句附前句附等の流行を見るに立至ッたのである

冠句附とは、十七文字の上五文字へ中七文字と下五文字と付けるので、其例として「眞中にの」の冠句があれば

（眞ン中に）本店からの內裏雛

（眞ン中に）あんよはお下手ぶら下り

（眞ン中に）橋をかけたも一と昔し

（眞ン中に）船頭のある紙の船

なぞの類で、今日も時々試みる連中もある、又前句付というのは下の句十四文字へ上句十七文字を附けるのである、例へば

匂ひこそすれ〳〵

とある前句卽ち下句へ

ならうなら井戸のを打ッて貰らひたい

の十七文字を附けて、句ひの意味を溝などの水を打水にした句ひにといッたものである、又

ならぬ事かな〳〵

の下句へ

國などで毎日入ると申すのは

と錢湯へ入ることの出來なかッたことなどを咏んでである、此前句附は全く川柳の源ともなるもので、初代川柳の如きも此前句附の判者として成功したものである、併しながら初代川柳の判をした時の前句は、上に示したやうな、意味が極めてよく連續してゐるのは少なくて、附句ばかりに妙味のあるものが多かッた、ソレで次第に下句の必要を認めなくなッたので、川柳は遂に其前句の十四字を省略する方針を取ッた、ソコで一の川柳點なる狂句は獨立したのである

三、川柳史の大要（下）

初代の川柳は、いつ頃の人かと云ふのに、寶暦の末から、明和の初頃に勢力のあッた人で、江戸淺草新堀端に住したる町名主柄井八右衛門の事である、八右衛門名主、號を無名庵川柳と稱して、前句附の點者として尤成功した一人であッた。當時より以後俳諧の點者兼前句附の判者は、頗る多かッた、呉陵軒可有編『俳風柳多留』十八篇に

東都前句萬句合判者連名

蝶々子　苔翁（當時二代）　竹丈　雲皷　白翁　菊丈　收月（一流撰者、享保年中一萬八千句集當時三代目カ）　如露（二代讀）　嶺松　南花坊　黛山　一翁　千鶴　圭女　東月　白龜　露丸　机鳥　錦江　川柳（寶暦七年丑初當卯年迄廿七年、至年々一萬句或二萬、安永亥年二萬五千餘句、集柳樽十八篇、末摘花初篇後篇出樽出）

などあるのを見ても分かる、尚同書四篇の序に

昔々の前句冠附は、蝶々子、苔翁萬句合に名を鳴らし、享保の頃收月出て、世話事に句意の可笑味を專らと撰みしより、江府在々の組々

迄これを好み、年毎に一萬の句員を集め、今に其餘風殘りぬ、爰に寶暦の始淺草新堀端の考士川叟、萬句合を發し、珍らかなる言葉に當世の俳諧とひとしき句姿を新斧せしに、或は一萬或は二萬の句集る事、此考士の妙とやいはん、因ッて書肆星運堂ぬし、『誹風柳樽』の小冊を編集し、二篇三篇となり、今玆四篇を集めん事を乞うに任かせ、近來の勝板行を拾ひ、集二二の篇とはなしぬ、于時明和六巳の孟秋吉辰、淺下吳陵軒述

など書いてあるのでも、其川柳史の大意を知らるゝがよい、此序にもある通り、初代川柳の撰んだ前句附の萬句合の中より、面白い句を更に再撰して、吳陵軒可有といふ人が『誹風柳多留』一篇を出してより、年々嘉永時代になる迄、『柳樽』は續々出版せられたのである

兎に角、前句附は元祿時代より流行して寶暦頃益々隆盛に達したが、マダ前句に拘束せらるゝ嫌があッたので、人の感興をひく力が少なかッ

たのを、初代川柳が、斷然俳句の連歌より、獨立した向うを張ッて、獨立してこゝに一の川柳卽狂句を樹立した功は大なものであッたではあるが、其川柳も前句を離れて一の川柳點狂句と獨立した時が、尤隆盛の極であッた、實に寫實的趣味の妙を極めてゐた時代であッて、此初代川柳歿後は『柳樽』は續々出版されても其句は全く日に〳〵非文學的に墮落して終まッて、時に一二見るべき句がないでもないが、殆ど全體より見れば三文の價値なきものとなッて、今日僅かに其流行の餘波を留めてゐるに過ぎないのである

初代川柳は、寛政二年に歿した、其生きてゐる間に『柳多留』は一編より二十三編まで出版せられ、別に『柳多留拾遺』『末摘花』等が出た、川柳の川柳たるものを求むるには此等の書と、『柳多留』以前の『暦摺』萬句合に俟つより外はないのである

初代川柳と同時に、慶紀逸といふ點者の『燕都枝折』六篇『武玉川』十篇等

も亦價値あるものだ

寢た上を深田のやうに跨ぎ越え

身代の崩し始めは紋所

等の句で其一般を知るがよい

川柳の後は其子孫や門人等が、繼續して明治の今日、尙九世川柳の名を存してゐるが、到底語るに足りる事實は一つもない、只四世川柳が前句附の稱を改めて俳風狂句と改めたのと、五世川柳が可なり人に知られてゐたのと、『柳多留』が嘉永三年迄に、第三百八十三篇を出し、ソレより小本の體裁が中本と爲り『新篇柳多留』と題されて、嘉永六年に五十五篇で中絶した、位のものである

川柳史に就いては、モチット語ッてもよいが、此書はそれが主でなくて、ソレに讀者になッても、餘り難有いものでないから略して置く

四、川柳史の拾遺

余が所藏してゐる『暦摺』の萬句合の卷頭に左の口上がある

口演

各々樣方御厚情を以年々前句繁昌仕忝仕合奉存候、又々當年も興行仕候、先達而神に誓ひ申上候通り、諸事僞がましき儀一切不仕、正道を專一と仕候、景物等も隨分入念差出候間、ひとへに御憐愍御贔負を以て御出精奉願候

萬句合　料十六穴　川柳評

追而申上置候、題之儀は其當日々々を相用一切おくりには不仕候

祝ひこそすれ〳〵

はづかしい事〳〵

にぎやかな事〳〵

未八月五日

はじめこそすれ〳〵
おびたゞし
はやい事かな〳〵
ほそい事かな〳〵

十五日

とくなもの也〳〵
かく別な事〳〵
かげんする
花やかな事〳〵
ほしい事かな〳〵

廿五日

わがまゝな事〳〵
よごれこそすれ〳〵

たゝみけり
ならべこそすれ〳〵
むづい事かな〳〵

九月五日

のこり社すれ〳〵
ちか寄にけり〳〵
にくらしい
やはらかな事〳〵
くちおしい事〳〵

十五日

まねき社すれ〳〵
つもり社すれ〳〵
ねんごろに

つらい事かなくゝ
こらへたりけれく

二十五日

にほひてそすれく
うつし社すれく　いひにくひ

十月五日

はやりてそすれく
うとみてそすれく

ひくいことかなく
まめなことかなく　よいかげん
そろひてそすれく

十五日

うろたへにけれく
すゝめてそすれく
もとめてそすれく　つなぎけり
おしつけにけりく
われもく　とく

二十五日

すてゝ置きけりく
見えつかくれつく　今少し
いたづらな事く
やりはなしなりく

十一月五日

見事なりけり〳〵

さがし社すれ〳〵

むくいけり

かくしてそすれ〳〵

能かげんなり〳〵

十五日

あくな事かな〳〵

まぎれ社すれ〳〵

はしりけり

もしや〳〵と〳〵

ひゞき社すれ〳〵

二十五日

仕合なてと〳〵

くりかへしけり〳〵

折り〳〵に

まてとなりけり〳〵

げびたてとかな〳〵

十二月五日

ふといてとかな〳〵

尋ねてそすれ〳〵

はづみけり

すいな事かな〳〵

せわな事かな〳〵

十五日

持上げにけり〳〵

ひろげてそすれ〳〵　きつい事

むかしなりけり〳〵

うかり〳〵と〳〵

二十五日

やぼな事かな〳〵

まかり社すれ〳〵　このみけり

はつきりとする〳〵

にごりてそすれ〳〵

閏十二月五日

取つきにけり〳〵

ちゑな事かな〳〵

一チめんに

ちよッとした事〳〵

十五日

○ちなりけり〳〵

おしつめにけり〳〵

わたしてそすれ〳〵　おきあがり

目出度かりけり〳〵

餅つく音に心いそ〳〵

二十五日

納め社すれ〳〵

又來年の秋を待ちけり

年わすれ

右の外追ひ題なし

一、我等無學不才のものゆゑ故事古句存不申候

一、御句類句にて突合候御句御座候とも御趣向宜しき御句の方勝句に差出申候、依之類句は一切構不申候御同句は出し不申候

一、五文字もぢり其外段々句の良點仕候、御卷被遣可被下候以上

安永四乙未年中秋　　淺草しん堀ばた　天台宗新寶寺門前　會林　集山

右は安永四年の萬句合の序であるが、其萬句合の初頁は

未八月二十五日開き

萬句合惣句高五千百九十七員

相印　花やかな事〳〵　三まひ板行

宮壹

川柳評

○ほしい事哉〳〵

▲わがまゝな事〳〵

×よごれ社すれ〳〵　たゝみけり

日本のまん中へ來て化けるなり（市谷田町はつせ）

げろ〳〵といふと大阪どつと逃げ（麻布永坂りう水）

▲みだりがわしき風俗が御意に入り（淺草新堀わかな）

鉞打を据ゑて前後へぱつとのき（下谷薩秀堂さくらぎ）

美くしさ明暮歌のおつき合ひ（市がやはつせ）

江口では佛と一ッ鍋も喰ひ（櫻田新橋四角たかね）

初ッの字が五百松魚が五百なり（小日向松枝町やうらう）

▲三味せんを大げさにやるお癇癪（かうじ町天神片町はつね）

御殿中僧正見ない所なし（四谷鹽町三丁目雨龍）

○四ッ手かゞ譯けを云ふ程ついてくる(芝二本榎水せん)
○口を書入れに幇間は一歩かり(神田三河町三丁目かきつばた)
×あの男此男とて古くなり(橋場町眞先せいくわ)
×生酔は下戸と櫻をねぢり合(橋町二丁目たち花)
▲かのけつと云へどちいさいあくでなし(下谷大門町いろは)
▲ぬけ支度してがう〳〵と云ふを待ち(青山御手大工町若竹)
▲ひろ〳〵と成てのろりと伯父の禮芝濱松町一丁目あふみ)
×お妾の憎くいは跡を濁すなり(小石川白山鶴龜)
×くさめするのがお妾の持病なり(御藏前瓦町むさしの)
○内玄關てゝにねなよと母へいひ(四谷雨龍)
▲のちの月又候かやう〳〵なり(かうじ丁はつね)

等の如きものである、かういふのが川柳前句の原本で、これから『柳多留』一篇から二十篇までのは抜抄したものである

ソレで此萬句合は皆作者の名がのつてある、即ち牛込の蓬萊とか神田のかきつばたなどいふのは、一段と秀句よみであるのに、『柳多留』に抜粋したのは更に氏名を掲げてゐない、又世間でも頭から川柳と呼んで、誰れが詠んだ句だか、一向お關ひなしといふ傾がある、併し其名句丈傳はれば、狂句の作家はソレで滿足するのであらう、此現象は他の韻文界に無いものと云ッてもよい、ソコで其の作家の率いた連中があつて、東の方鳳凰連、古月連、蓬萊連、錦連、名木連、眞砂連、櫻木連、西の方柳水連、若菜連、伊呂波連、近江連、朝日連、紅葉連、風雪連、夕照連、登連、杜若連、井升連等の取組の句合で川柳の判などしたものもある、ソレで歌の方で歌合と云ふやうなものを、川柳では角力會と唱へてゐる、今日明治の詩壇にも根岸連、澁谷連、竹柏連、新聲連、文庫連、舊派連なども見える、文壇に於ける赤門連や早稻田連、硯友連に寺島連などもあるが如く、川柳にも此多くの連中がゐるが別に大した軋轢なぞはせぬやうで、至つて呑氣なものらし

いものである

又宮印三まい板行と云うのは、毎月三回の内の一回で、三枚乃至四枚を半紙版の木版で印行したのである、宮印とか松印とか梅印仁印禮印などは、其會の時の咏草を板にした符帳である

又川柳の萬句合と一所に、露丸の評點をしたものもある、ソレは

合印　貳まい板行(百花堂)

大壹

露丸評

(申九月八日開き萬句合惣連四千三十五員)

あはせ社すれ〳〵

○われも〳〵と〳〵

■やぼなことかな〳〵

×せまいことかな〳〵

▲またせてそすれ〳〵

折ムシ

のぞみけり

○無禮講首から下は無官なり(牛込御細工町龍水)

▲土佐駒の御庭へ廻る御成人(神田壽水軒八橋)

▲花籠へ附るは下女も一ッゐり(市谷田町初瀬)

饅頭は手の平へ來てたとへられ(淺草花川戸東雲)

○御入滅尤な事猫が見え(牛込水道町江戸川)

○傾城の夢は日の出にトロ〳〵見(飯田町中阪布引)

○ひつかけて挨拶に出る暑氣見舞(麴町三丁目龍田)

▲新造は是だ〳〵と目をふさぎ(麻布飯倉松枝)

▲美くしく施無意の下に拜がんで居(牛込高田明石)

▲一方は娘の防せぐ大晦日(牛込原町千とせ)

▲三聲目の禿を呼ぶは奉頭なり(淺草しのゝめ)

▲石燈籠杖でたゝいて直をつける(市谷はつね)

大帳に村跡のつく支配人(同)

×看病を腕づくでする狐付(同)

以下は略すが、是れで一斑は知られるだらう、終に『柳多留』の序を二三掲げて類想の資とすることにしよう

俳風柳多留初篇序　　吳陵軒可有

五月雨の徒然に、あそこの隅こゝの隅の棚より、古年の前句附の刷り物を、探がし出し机の上に詠むる折しも、書肆何某來りて、此儘に反古になさんも本意無しといへるに任かせ、一句にて句の意の解かり易きを擧げて、一帖となしぬ、就中當世俳風の餘情を結べる秀吟等あれば、妹背川柳樽と題す、于時明和二丙仲夏淺下の麓吳陵軒可有述

同三篇序　　福芝齋

川叟評明元申年の頃、秀逸の中より俳諧にひとしき句體を、書抜き、初篇に述べし如く、題を略して俳風やなきだる三篇とはなしぬ、明和五の孟秋吉辰

同四篇序(既出)　　吳陵軒可有

同七篇序

絹布に正札附有、蕎麥に正直あり、其店市をなす、今川叟の評は正道を專らとし、聊かも最貧の沙汰なし、故に年毎に寄句增員す、好人來る仲秋五日の會を遲しと待たるゝ中に、予横好の僻に、齒を硏すまして

滿月のそのこゝろみや五日月

明和九辰孟秋吳陵軒愚序

久良岐曰く、川柳の萬句合せは此序にもある如く、毎年秋から一月末までに毎月五の日に點をしたものと見える、ソレは前に掲げた『暦摺』の兼題を見ても知れる

同二十篇序　雨譚

昔々三十年も昔より開き、毎に上名護屋をはづさず、自ら名にし負ひたる翁あり、連中怒ッて叱言を云へば、でりやうけん〳〵と詫びて笑ふ、そが年々組立てたる柳樽早二十といふに及ぶ、此道の榮え、人のめづるも知るべし、其初めに言添へよと乞はるれど、今の上野拙き口に云はんやうもなく、松が岡あまたゝび否めど、本庄の強ひてせためられて、面の皮三寸舌長な奴と、江戸中のお叱を受けんは合點なれど、十三日どうでなければならぬ物と思ひ切ッて、敕使三度やみくもにしるす、天明乙巳冬雨譚

同廿三篇序　如猩

淺草新堀端川柳叟年々萬句合の泉なるを利き分け、上戸も下戸も湧しむる其うまみを乞ひ請けて如例柳だる廿三篇に汲込み、書林星運堂に送り侍る、各不相變御披き被下んせ

同廿五篇序　春風舍扇朝

年々歳々華に似たり、盡せぬ水の言の葉に、柳の老木枯果て、此道既に絶えなんとす、時に笛先生なるもの川叟の俳風を慕ひ、是絶たるを繼ぎ、廢れたるを起す、聖敎に叶ひ翁の撰評に比し、社中誠に闇夜に往きて、燈に逢へるが如く、歡喜の颯々と耳に盈てり、予進めて家名喜多留廿五篇とはなしぬ、寛政六のとし秋、市中庵主述（笛先生とは和笛老人の事なり）

同四十九篇序　星運堂菅裡

前句合古川叟世を辭して後、舊連和笛子跡を次いで盛んなりしに、風雅を泉下に及し、暫く此道絶えんとす、時に好人テウ錦麥曉古の六子麹街に再建の催を爲すに、古今の好人其意を助けて、中興の會始めて盛なり、これや世に大江戸の町の始也と唱ふる所に催せしゆゑならんと、萬々歳も此道の榮えを菅裡伏て願ふ、文化午之春　十返舍一九

同五十八篇序

味酒の三輪にあらねば、杉ばやし立つる門にもあらず、版元の花屋のしるしは、柳樽の汲めども盡きず、跡ひき上戸の何篇も繰返して、今五十篇の大盞引受たる志津丸子の手際はすつぱり、撰み出せる句には皆一本木のまじりなし、予も飯よりは好きの道、此酒の美味を感じ鼻のさきをひこつかせて斯くの如し、文化辛未十返舍一九誌

同七十五篇序

柳亭種彦

爰に酒あり、柳樽に湛えたり、彼の鬼貫が伊丹の輕口に勝るは、新川ならぬ淺草新堀川柳が釀して、世の人に涎を流させしよりこの方、其杜氏川柳の名を繼ぐ者、三世にして酒造りのことを廢す、今眠亭賤丸よく其術に長たり、故に樽次底深に劣らぬ好き人等、賤丸をすゝめて四代の杜氏川柳と仰ぎ、河内屋が奥藏に名開きの筵を設く、集る句は一萬に餘り、數百人の連衆、高樓に居流れたり、于時文政甲申の秋九月十二日の曉天いまだ星の消えざるに、開口文臺に向ひ、樂評加評の數卷を披露し、日沒を燭

に次ぎ、兎角して川柳が撰る卷を吟じ終る頃は、十三日の朝烏東天に輝けり、嗚呼此道の廣き武藏野にや比すべき、びつくり丸にや譬ふべき、若し小原のせばき心もて、蜂龍のさし合をいふ者あらば、罰盃三杯を盛らんと新連の荒走り、木卯と替名せしえせ作者種彦、順の舞に浮かれ出、醉中に漫書す

同八十五篇序

葛飾北齋

鋪島の道は正うして動ず、縱ば人の立るに等し是眞といふべきや、連俳は前句の意を傳へて其樣を異にす、卷中自歩が如し亦行ならずや、されば此風詠は滑稽を元として興を縱にす聞人咄笑して能世に走るを以て艸とせんか、しかも川柳の枝葉繁茂して、八十五篇の署名を分つ、夫が中に女郎花と呼べる名を愛て、馬喰町に居る清冽の主、一ト年風流の筵を開き、四方の好子を勸めて、何百有餘吟を集め、川柳翁の撰を乞ふ、甲乙の位定まりて、上木して集の末編に備ふ、僕其筵に列るを以て、是に序せ

よとなり、幼より畫を好むの癖はあれど、文編の筵を窺ふの服なく、烏焉馬の誤り、いかにせんと再三辭すと雖も許さず、已むを得ずして丹青の筆を霑ぎ、純墨を點じ、文に似たるとを記す、見む人咎むると勿れ、于時文政酉夏

五、川柳の價値

僕が評論屋であるならば、こゝで一ッ『文學上に於ける川柳の價値』とか、何とか、晶子君の所謂氣焔の焔のほのほの火の手でも揚げるのであるが、理屈と蒟蒻とは僕は大嫌であるから、知れ切ッた理屈を、美學屋の術語で揑ち上げることはよしにしやうが、武島文學士は、近く『帝國文學』で

滑稽の起てる場合を別ちて三とせん、一は二事物の間に意外なる關係の發見せらるゝ時也、二は尊き者の貶せらるゝ場合也、但しこれに二種あり、中傷諷刺の目的ある者と、無きものと也、第一の場合

に起る滑稽をキットといひ、第二の場合に起る滑稽にして、譏刺の傾向あるものをサタイアといひ、其傾向なきものをユーモアといふ、川柳の根源なる前句附冠附時代の滑稽は盡くキットなり、川柳に至りて始めてユーモアとなり、サタイアとなれり、價値に於てユーモア、サタイアのキットに勝るは爭ふべからず、川柳の前句附冠附より勝れたるは洵に是故とす

と云つてある、これは云ふまでもなく、ユーモアなる自然滑稽の方が、罵倒的のサタイアに勝り、不釣合より來たる滑稽キット抔に勝つてゐる、が、罵倒的滑稽も萬更捨たものでもないことが往々ある、ソシて下手なユーモアより、上手なサタイアが勝さるることもある、何にせよ滑稽文學の餘り振はない、我國文界に於いて、川柳の如き滑稽譏刺を得たのは、尤も喜ぶべき至である

そして川柳の喜ぶべき所は、最も江戸ッ子的なる所にあり、日本人的な

る所にあるのだ、川柳は尤平民文學の純なるもので、無學の熊さん八さん的なる丈ソレ丈、赤裸々なる觀察を下し、毫も虚禮や道德などいふ僞善的臭味がなく、亦他の文學のやうに外國文學の感化を受けてゐない所に面白味のあることである、ソレであるから自然ニイチェ流の筆法もあッて、人生の裸體的眞理を喝破するの妙もある、いかなる英雄も、君子も儒者も美人も、坊主も神官も皆此川柳の前には一言隻句も出ぬのである、一例を示して云へば、近頃鬼才女史の

柔肌の熱き血しほに觸れも見で淋しからずや道を説く君

と咏んで世の戀愛を排斥する道德家を罵ッた、大膽な歌として云ひ囃されるが、到底川柳の

辨慶と小町は馬鹿だナアかゝあ

の大膽と至理至妙なるには及ぶべくもあらずではないか、又源義朝を弑した長田父子の如き者も

睾丸を摑かめ〳〵と長田下知

の前に噴飯せざるを得ない、又徂徠とか仁齋とかいふ大學者でも

化物の話を儒者はシッ叱り

の冷語にはグウの音も出すことは出來ぬ、又閻魔大王さへも

大王は笏を呑まんづ御口つき

など揶揄せられてゐる、又生娘、花嫁、後家、女房、下女等悉く川柳の材料たらざるはない、何しろ僅々十七文字で、寸鐵殺人の罵倒もやれば、種々の方面に向ッて、一々其滑稽なる擧動を躍如として眼中に幻出するの妙は、川柳を置いて他に求むることの出來ぬのである

六、川柳の内容

所で、川柳の内容にはいかなるものが含まれてゐるか、和歌などは花鳥風月戀無常などと相場が極まッてゐる、俳句なれば同じく四季の風物人事を詠むが、川柳は重に人事を風詠するので、俗に無季發句の名稱も

ある位で、又雑俳とも唱へる、尤俳句の方にも一茶、大江丸などいふ滑稽俳句を主として咏む者もあッたが、これには必ず季節の風物を咏み入れてある、川柳にも滑稽俳句めいた

夕涼みずしりと俵落す音

キャッと云ふ娘の跡を蛙飛び

など云ふ一茶よりもズット以前に、一茶の滑稽俳句に劣らぬものも多い、が、總じて重に人事を主としてことさらに季節の物を咏込む抔と云ふことともなく、亦俳句のやうに重に客觀の叙景詩を尚ばぬのみならず、反對に主觀の罵倒をヤッたり、又客觀に滑稽なる人事を叙したのである、シテ其人事はドンナものかと云うのに、先刻御合點の下女、居候などいふのは第一に屈指されるやッで

下女の晴れ(着)何ぞといふと黄八丈

白粉(おしろい)をした下女首を繼いだやう

下女文を讀んで貰らッて憤り

下女の文、書いては喰つて終(い)まう也

田舍下女いッそ眞綿と摑み合ひ

の下女から、毎々落語家に紹介される

居候三バイ目にはソッと出し

居候嵐の屋根を這ひ回る

居候タバ(烟草)と云う字を除けて喫み

等の居候からして、花嫁には

嫁の髪巳午の間にやッと出來

孕むのを嫁ほうぐてせつかれる

笑ふ度び嫁手の甲を口にあて

みんな顔隱くすが嫁の大笑ひ

生娘には

叱られた娘簞笥へよりかゝり

娘早、脇の下から用を足し

馳けて來た程に娘の用はなし

後家には

もう後家もやめねばならぬ腹になり

石塔の朱い信女が又孕み

助平野郎には

若後家のたよりに爲つてヤリたがり

後家の年内端にあてるイヤナ奴

から圍碁、虚無僧、御用、放屁、婚禮青樓、遊蕩兒、演劇、角力、生醉、醫者、淺黄裏、獨者、長局、乳母、針妙、腰元、坊主、蔭間、女房、亭主、座敷牢等其他百般の人事悉く

奇警なる觀察を經て一々批評の槍玉に揚げられてゐる

又一方では歴史、羈旅、哀傷、釋教等の方面も開拓されてゐる、就中歴史の部になると、いかなる英雄、君子、賢女、烈婦多くは滑稽化されてしまふ、が、又必ずしも滑稽の趣味のみで優れてゐるのではなくて、賴政の鵺退治を

其暗さ早太櫻にッ、かゝり

等と、いかにも其場合を想像せしめて餘りあるものもある、又

三郎は筆で毛虫を掃ひのけ

の句を誦しては、いかにも兒島高德が櫻樹を削つた時には、さもあらんかとも可笑しいのみならず、想像も明らかになる

祐經は二度目の大刀が深手也

の富士の裾野の仇討に、いかにも二度目の大刀卽ち弟曾我時致の大刀風は鋭かつたろうと思はれる、同じく

松明に工藤の夜着は三所焦げ

の句の如きに至っては、滑稽を離れて遙かに俳句の妙を奪つてゐる、それに

源左衛門鎧を着ると犬が吠え

などは、尤人をして噴飯せしめる、尙此等の面白き句のことは、後章に於いて述べるとしやう

ソコで、川柳は人事計咏んで季節に關しないかと云うに、全くソウ計は限らぬ春夏秋冬の季節に關する者も亦多く咏み入れられてある、春の部には

歌かるた人といふ字に手が五ッ
上るなと云はぬ計の帳を出し
初子の日かぎ裂きをする御遊也

逆鱗のやうな内裏は賣れ殘り
花の山拔いた〳〵が嵐也

夏の部には

竹の子は盗まれてから番がつき
呑み過ぎた疊の醉は梅雨に出る
武者一人叱られて居る土用干
舌うちで振舞水の禮はすみ
涙臺天はどうしたものといひ

秋の部には

あかぎれが切れると茄子もしまひ也
紹の羽織螢が着るとしまひ也
七夕に虎の出そうな長局

よく見れば手の届く丈澁い柿
摺古木で下女も砧の加勢をし

冬の部には

夷講亭主の曰くきつい不漁
ふし穴を座頭の見出す寒い事
からめ手を女房の防ぐ大三十日
鐵砲の皮をくれろと三ばい目
節分の鬼切丸は赤鰯

此他に春の部では年禮、萬歳、七種、藪入、出代、雛、二日灸、野がけ、涅槃、角兵衛獅子、花見等が重に咏まれ、夏の部では時鳥、初鰹、竹の子、雲の峰、夕立、五月節句、暑氣見舞、西瓜、蝦の禮、蟬等が咏まれ、秋の部では、索麵、新蕎麥、朝貌、月見、草市、螢、紅葉狩等、冬の部では初雪、煤掃、節分、年忘れ、鰒汁、年の市、餅搗、厄

拂、大三十日等である

七、新古句法の優劣

シラビックなる我邦語は、他國の言語に無き一種の、ヒッカケ言葉、縁語等を產み出だして、時に其妙を感せしむるものも少なくないが、これあるが爲めに、和歌先づ墮落し、俳諧次いで墮落し、狂歌の如き尤墮落の甚しき者あり、而して近世に至つて迷夢未だ全く醒めず、全く病膏盲に入れるの感がある、其一例として三遊亭圓朝が、其作物文七元結の落語に賛して曰く

孝行によりをかけたる元結のかみ(紙、髪)も縁を結ぶ文七

等の、元結の紙を髪とをヒッカケ、よりをかけ、髪を結ぶなどの縁語を以て一首を混ち上げたるものにして、一首何等の詩趣もあらず、只三十一字の寢語斗であるが、今日俗間に流行し歡迎される狂歌は、全く此種のものである、ソレと同じく初代川柳已後の狂句も、悉く此毒に中てられ

て、殆ど滑稽もへツ々クレもあらず、只猥褻淫靡なる駄句と、縁語ヒッカケの贅句と、平凡理屈を繰返せる惡句との競爭場に異ならぬのである、余が以上揭げたる句は、多く初代川柳の撰拔に係れるものなるが、其いかに多くの滑稽趣味あるを知らるゝがよい、ソレに反して後世の狂句の猥褻なる者はこゝに揭ぐるを屑しとせざるも、實に人をして嘔吐せしむる者が多いは、『柳樽』二十四五篇より以下を見て知らるゝがよい、尤初代川柳の際にも『末摘花』二冊の如き猥褻に關する者があつたなれど、ソレでも多少は詩化されて、左程に惡感は起させないが、後世のとなると何等の感興も浮ばぬのみか、實に拙句とも惡句とも云ひやうのない者計で、只下等な人種の弱點に訴へて落ちを取ることにのみ汲々としてゐる

尤、此猥褻なる、俗惡の句が跋扈するを憎んで、是れをバレ句と稱し排斥した人は無いでも無かつたが、夫等の多くは反動として、下手な道學臭

い句を尙ぶ傾を生じてゐる、否らざるも亦引掛ケ縁語の駄句に汲々としてゐる、シテ夫等の駄句といひ贅句惡句といふべきものはどんなのかと云ふのに

馬鹿は尻利口は目から鼻へ拔け

松茸の根元に松露二ッあり

裏店の尼將軍も政子形

ひつぺがし揉んで投出す角力膏

文を書く娘は封をきらせる氣

ほの〴〵と明石丁から船でこえ

まだかゝる俗惡な句は、澤山あッて到底これを擧ぐる遑が無い、だが此俗惡な句でも、マダ意味の通じてゐる分の中で、中には平々凡々何等の意味も無い死句を以て充されてゐるのは、實に浩歎の至りに堪へぬ所

である

句法でも、初代川柳時代には、まだ多少前句の調べがあッて、何所となくサラ〳〵としてゐる、例へば

手のひらへ赤子を乘せて叱られる

下紐といふは木綿の事でなし

萬歳を下女ありッたけ笑ふなり

ちよッ〳〵と逃げて鍛冶屋の火にあたり

初手二人あと四人は追手也

等であるが、後世になる程、句がゴッ〳〵して、ソして調が野臭になッてゐる

椎茸を出しに内中皆芝居

大天窓冠ッて舍弟蝦夷へ落

葵の能は邪を拂ひ仁を增

天聽に達す地の酒人の孝

累卵の世帶は糊で御救ひ

金に成る細工命の彫物師

ふんどしの衣紋をつくる角力取

等の如き者で、實にセカ〳〵として何等の興を催すことが出來ない、明治の今日になッては、ます〳〵墮落して句に品位のあるものが更に無い、今明治二十八年一月神田明神奉納の『柳風狂句』の中で、九世川柳の撰んだ句を擧げて見よう

神も元人なり天も地の分かれ

能役者習慣汽車に乘後れ

心せよ戀と恨みは直隣り

又同じ集稻の舍の撰には

神寶は無窮鑄物師は天津眞良

今盛り十九世の姫の國

臍が產む子は貯蓄課へ里にやり

其他は云はずと知れてゐる

さりながら此後世調と雖も其可なるものに至ッては、亦一々排斥すべきに非らざれど、いかんせん多くは理屈で捏ね上げたる、非文學的のもの計であるから、何うも瓦礫中に玉を拾うの勞多きに堪へられるものでない

八、句法の研究

句法の研究も、極めて精細に論じたなら、中々紙數を費す恐れがあるので、こゝでは單に其一斑を示すに過ぎないのである、尤句法は俳句と同じく廣く諸體に變化のあるのが宜しいのであるが、餘りタルミのある

のは俳句と同じくよろしくない、何にせよ片端から云ッて見ようなら初句に名詞を置き、中下の二句に其動作說明を與へるとか、何とかする、タトへば

居候、此かゝあとは思へども

車曳、女を見るとイキミ出し

鼻毛拔き、堅くつかんで馬鹿な面

小兒醫者、坊や〳〵とニジリ寄り

又初句に名詞を置くが、『は』『に』『を』抔の詞を副へるのは

生醉は、もたれかゝるがキッイ好き

前垂を、はづして內儀强ひに出る

汁の實を、買ひに出すので弟子下かり

又初代川柳頃には也留が多い

居つゝげに高をくゝるは實子也
約束を違へぬ紺屋あはれ也
叱られた通りに母は叱かるなり
お背中をキック流すが返事なり
いんぎんに云はれる嫁は不首尾なり
白うるりいはれを聞けば絲瓜也
姉は姉だけ毛氈をねだるなり
去ッた〳〵と云ふけれど逃げた也
金を溜めるのがうんつく上手なり
醫者は醫者だが藥箱持たぬ也
一ッ足のくされと書いて豆腐也

人別をめでたい事でぬけるなり
立膝で打ッが鍛冶屋の亭主也
かわらけや一日てまを廻すなり
伊勢縞で晝間は堅い息子なり
十露盤で貰らへば娘も下卑る也
遣り手の口と土手とが八丁なり
見世賣をせぬが傾城は手柄なり
花咲かぬとは追い込んだ辭世なり
きようとい趣向は女郎の奴なり
申し子は夢計でも出來ぬなり
三ン段切れで一ト切れはさしみなり

よしや君などと西行理詰なり
幽靈もたいしんでんは消ぬなり
錢車若衆が一人まじるなり
變哲もなく爺樣と炬燵なり
梅柳山はほつとして渡るなり
しんからも出ますと外科の座なりなり
上草履客がはいては靜なり
かん所が三十日できまるなり
猫の戀撲たれる時が別れなり
來ずといゝ人まで雷の見舞なり
首打落し灰吹の掃除なり

野掛道折節連れをなくすなり
茶屋が株先ン僧正のかたみなり
お妾の書物メリヤス計なり
あれ計男かと母じやけんなり
萬歳を下女ありッたけ笑ふなり
人二人かばッて局不首尾なり
神樂堂立聞らしくあるくなり
なげるなと云ふは涼みの角力なり
ちッとづゝ叱かつて仕着渡すなり
あふれ女郎夜食を喰うが思なり
鐘供養全體わるい矢さきなり

能イ音の折檻坊主頭なり

質屋より女房はひどくはたるなり

起きてゐて寝たふり酒屋上手也

腹の立つものは年増のイビキなり

店中で知らぬは亭主計なり

鳴子曳よく〳〵見れば盲なり

試みに抓ッて見れば無言なり

家形舟山の這出る如くなり

此他この也留めは頗ぶる多いが、後世に至ッて此なり留の句はトント見かけねやうになッたが、此なり留の句は何となく淡白で古雅な所が多いと思ふ、かやうな句は須らく再興せんことを望むのである、余も試に

モッシユ、イトウ又來なんしは巴里也

昔なら古河早速闕所なり

など作ッたことがある、尤以上擧げた句の中にも初中二句で其體を異にしてゐるのもある

店中で知らぬは亭主計なり

の句法と

首打落し灰吹の掃除なり

の句法と

あふれ女郎夜食を喰うが思ひなり

の句法と多少殊ッてゐる、これらはよく研究されるがよい

又同じなり留でも、成り留の方は句數が極めて少ない

下駄を穿く時棒組は杖になり

無けなしの一分遣ッて暇になり
おとなしくなると目付が惡くなり
杜若衆盗んだ娘嫁になり
女房に惚れると先が近くなり
谷汲で所の知れぬ人になり
等である、又後世に無き調の一に、事留あり
賣喰ひを女衒の見込ムむごい事
節穴を座頭の見出す寒い事
千住川よしの丶通る寒い事
二十四相に下駄を賣るとんだ事
十五足早馬の出る不慮の事

八朔に黒助で居るつらい事
等でソノ一般を知るがよい、この事留も再興したいものだ、余も亦
師の君の背の君となるきつい事
又何々云ひと留めたり、抔といひト云ふのは川柳の特兆と云ッてよい位だ
ふい〳〵と出るのを伯父に母はいひ
憎いやつ亭主の事を彼奴といひ
近過ぎて穴が知れると五百いひ
タッタ二度行ッたに女房放蕩といひ
旅の留守見舞一日ムダをいひ
文やどんまうでざんなと女房いひ
おれをさへ二分騙ッたと伯父はいひ

死なば死にや抔とこわ〴〵母はいひ
拜がんだら吃驚しようと仲人いひ
本性を違へず開き升といひ
銀烟管銀のやうだと親父いひ
持てぬやつ舟宿へ來てワリをいひ
十二坐のしまひに出ろと亭主いひ
仕合せな我はものだと女衒いひ
いやアまだ御座なされると素見いひ
小便をすわッてしろと女衒いひ
兼好はあつかましいと跡でいひ
關寺で久しいものと勅使いひ

女房に舌はありやと幇間いひ
吉原計月夜かと女房いひ
さあ雪だ出たくなッたと女房いひ
又今日も焦げを喰はすと詩人云ひ
きり〳〵と脱げと追剝すいつける
ちんまりと居なと山出し叱られる
琴爪をちんぼうにはめ叱られる
花嫁を見に出た娘なぶられる
二日酔呑んだ所を考へる
指さしで座頭に敎へ笑はれる

又、る留の句も多い

等である、余の句に

等の如きものである、又後世の句には、よく、下女思ひ、トか初手思ひと三句に据えるのが多い

句ふ宮雪隠神かと下女思ひ

等の類あるは、汎く人の知る所である、余の句

帆柱を葛根湯と初手思ひ

それから、川柳の特徴として見るべきは、ソノと云ふ代名詞をよく働かして用ゐる點である

その手代その下女晝は物言はず

花嫁はその夜いふべき詞なし

花嫁はもうその頃といふ病なり

又其寫すべき人物の言葉を活用するのは日本の他の韻文に見られぬ點である

キッサキを袂に當てゝ二分ひきやれ

不承知さこゝでも聞えやすといひ

土手の上、ヤア何所へとは馬鹿な奴

辨慶と小町は馬鹿だナアかゝあ

これでかう摑みましたと、綱話し

晩あたりチット來給へ、どれも下手

後家の義理いゝへ〳〵で小半年

サア陣を引かうと這入る涼み臺

折檻にマア〳〵〳〵と蓋になり

ちれッたいお子だと、守は二ッゆり

より玉へ、あがりなんしと、新世帶

戸を明けて、オヤ〳〵〳〵と雪の朝

琴棋書畫並べた計り、知りんせぬ
あらかじめ覺つて女房へ、ンなり
いかいと伯母ちやんがのと尻を割り
厭なれば厭といやれはいやみなり
馬鹿めらと雪見のあとで呑んでゐる
小兒醫者、坊や〳〵とにぢりより

等頗る多し、其人物活動して躍如たるが如きものあるを、よく思ふがよい

又マア〳〵、オヤ〳〵、ヒヨロ〳〵などの語を用ゐて實況を適切に思はしむるもの

コリヤ〳〵とお乳母外づした飛車を借り
折檻にマア〳〵と蓋になり

出來るやつへ、〳〵〳〵と先づ笑ひ
戸を明けてオヤ〳〵〳〵と雪の朝
心太ヒヨロ〳〵と畏こまり
麥畑ザワ〳〵〳〵と二人逃げ

の類の如き、其妙人をして覺えず噴飯せしむるものがある

又漢語若しくは成語を用ゐたもの

父は子の爲めに隱くして晝間買ひ
拔けた夜具ゐますが如くふくらませ
若後家の豈勾當を望まんや
賣殘り實に十目の見る所
野良出合、鴻雁列らを亂すなり

其他漢學流行の感化多少はあるものゝやうに見られる句も多い

又造語警句で、可笑味をつけたのは

毎夜出て人を摑かんで喰う按摩

末長くいびる盃姑さし

道具方岩をちぎッて鼻をかみ

此内で產れた内儀負けてゐず

お妾を取つて除けての御險約

女房はキカヌ藥を煎じてる

銃砲の皮をくれろと三杯目

取混ぜた化物の出る紫宸殿

面の皮うしろへ投げる黑ん坊

又川柳の正當なる調は俳句の如く五七五なれども、七五五、八四五等の變格がある

學者必ず、間拔なる面ッ付

ケチな二の足、妻にも申しきけ

空を睨んで、みそこしを持ッてゐる

出まして留守とは、御念のいッた事

伊勢物語、勿體ないと親父いひ

虎の鳴聲を、聞かれて儒者困り

どつとせぬ、嫁今日も干し〳〵

息子おもへらく、三分のものはあり

聞分もなく、又來ては蚊を入れる

等の如きで一般が分かるであらう

又前に云ひ殘したが、との字の多く必用なるは、上に擧げたる句中に求めて見れば知れる

これでかう掴みましたと綱話し
おれをさへ二分かッたと伯父はいひ

又との變格の一で

とは知らずしてかゝあ今戻つたぞ
と見渡した所下戸はおれ一人

又抔といふも多く用ゐられる

釣れますかなどゝ文王側へ寄り
鳴神(芝居の)はして〳〵どうだ抔とぬれ
死なば死にやなどゝ怖わ〳〵母はいひ

又何といふのも

嫁何をかけたか折は捨てゝ逃げ
貸本屋何を見せたかとうづかれ

又アノといふを用ゐし者は

あの女房すんでに己れが持つ所
あの後家と大屋そも〳〵からの事

又さ留、これも後世にはない調だ

伯母が來て黑吉にする耻かしさ
罩丸を二才の洗らふ憎くらしさ
めのうへに藪入を見るにぎやかさ
衣裳改め里でするむつかしさ
仲人のあとから出來る面白さ
目の玉に追回さるゝうつくしさ

此他まだ細密に分類すれば、あるけれども餘り長くなるので、次章へ移るとしやう

九、川柳の雑感

川柳の評釋、洒落の解剖、餘りホメた沙汰のものでない、謎とか洒落とか云ふものは、默識意會、フヽンと了解した所に、少なからざる妙味があるもので、これを一々手を取つて敎へるやうに云ッた日になッて見る日になると、一向面黑ろからざるものであるが、短歌や俳句に評釋を要する今日、川柳にも講釋をしなければ、一向其丈の妙味をも知らずに、素通りする坊チヤン連が多いからトハ口實、內々紙數增加の窮策から、自分の面白いとおもふ句を說明して見ようと思ふ、が、彼の『川柳難句評釋』の如きは、徒らに謎のやうな駄句計を解釋して、其詩的奈何を問はぬ缺點があるから、余は專ら詩的趣味のあるものに付いて說明することにした

ソコで一寸云ッて置たいのは、川柳の缺點として、字句の簡單な所から、兎角意味不明瞭なものや、又時代の隔りから生ずる事物の興廢などに

依ッて分からないやうになる句も多い、が、此前者の弊は後世に至るまで甚しくなッて、殆ど判じ物のやうな句を喜んでゐた、其一例として

達摩樣お錢を見ると眼が据はり

公卿惡の側に魯國の實事師

等のもので、意味をよし解して見た所で、一向愚にもつかぬ句であるのだ、只意味が分からぬため、何のことなしに面白そうに感ずるのだが、これは最忌むべき缺點である、近頃の『文藝倶樂部』に魚河岸に關した「小田原町上で天女がのぞいて居」といふ淺草寺の欄間の天女が魚河岸小田原町奉納の大提灯を下に見てゐるといふ意味の句で、近代の川柳が命ガケで苦んだ、馬鹿々々しき話が揭げてあるが、個樣な弊は務めて排斥せねばならぬと思ふのである、これ等の弊はモト、普通的事物の誰れも一言にして了解すべき物とか故事とかの上に就いて、其中の著ぢるしい點を捉へて、讀者をして先づ何事なるかと判ぜしめて、後其意味を解

すると同時に、少なからぬ興味を喚起させる手段で、ソレが巧く行けば一段とお慰みであるけれど、下手に行けば到底愚にも付かぬ謎語の最拙なるものとなつて終まうのである、例せば

祐經は二度目の大刀が深手也

と云へる句にありては、祐經卽ち工藤祐經に對して曾我兄弟を思ひ、兄弟よりして初手は兄十郎祐成が切かけ、二度目は弟五郎時致が切付けたことを了解せしむるので、面白味が生じるのである、又

拍子木で捨子の股をあけて見る

拍子木でト云へるにて、夜廻の柏子木なること、捨子の二字に對して明らかである、又

泉岳寺他宗もみんな引受ける

これは一向ツマラヌものではあるが、泉岳寺といへば、直ちに四十七義士を聯想するので、よく意味は通じる、これらの泉岳寺的に、茅場町、今川

橋、根津、芳町などの町名が使用される、又歌界で根岸と云へば正岡子規氏の事で、澁谷と云へば鐵幹氏を呼ぶにひとしき者である、これは團十郎を築地と云ひ、三絃の方では檜物町、植木店等の稱呼と同一のものである、が、事物の代名詞や人物の代名詞に使用される町名などは、頗るダレにも分かり易すい顯著なるものでなくてはならぬのを、後世になると矢鱈に樂屋落なる町名を使つたりするので、マス〳〵分からなくなるのと、一方では芳町が昔は蔭間の巢窟で、今日では日本橋藝妓の住居と變化したやうな場合が多いので、遂には何事を咏じてあるか分からなくなる、ソレ故にこれから町名などを用ゐるのにも餘程注意をせねばならぬ、又川柳で吝嗇な老爺を伊勢屋と呼び、好色な下女を相模と呼ぶのは普通であること位は知らねばならぬ、モ一ツ云ひたいのは、可成創意をつとめて、餘り古句の引寫しはヤメにしたいものだ、ソレに歷史の句で、當時の狀況に對して當世語を用ゐて、滑稽ならしむるは川柳の

妙である、タトへば

どう〳〵と云ッて仲國笛を出し

とあれば、いかにも彈正大弼仲國が勅命を奉じ、嵯峨野の奥に小督局の有處(ありか)を探りにいでて、琴の音を遙かに聞いて、琴聽橋の明月に、あだかもドウ〳〵と馬を制しながら腰なる笛を取出しそうな有樣が見える

これでかう摑みましたと綱話し

渡邊の綱が、羅生門の鬼の左手を斬取り、歸り來ッて來訪する人毎に、其鬼の腕を示して、これでかう襟上をつかみましたと話しさうなことだと肯かせる

お浴衣よ糠よと長田初手は云ひ

睾丸をつかめ〳〵と長田いひ

等の如きも、いかにも長田父子が源義朝の勇を恐れて、浴室に誘ひ弑する時、かような擧動もあッたらうと推察せられて可笑くなる、が、悲しい

ことには後世になると、無學の先生計故、頗る滑稽の分量が分からないから、何事にも此洒落を亂用すればヨイと心得、眞面目な忠臣英雄にまでも、惡謔を應用するは、人をして不快の念を抱かしむるものがある、ソレは

正が出りや、よいと内侍へ寄かゝり

これは新田義貞朝臣が勾當内侍の色に溺れて、出陣しなかつたのを、江戸時代の遊蕩兒が女郎の側へベタリ付いてゐる樣に擬したのだが、正成公をいかに滑稽化せんとて、江戸時代の通人的名稱に正など呼捨てるは、人をして嘔吐を催せしむるものがある、コレ等は修辭學上の貶稱の穿き違へで確かに一大弊所と云はねばならぬ、又

判官はどれだと笏で陸へさし

は源平屋島の合戰に、能登守敎經が弓を以て船中から、陸上なる九郎判官義經を射て仕留めんと、部下のものへ義經の所在を敎へしむる擧動

が遺憾なく寫されてゐるが、これに反して

お立だと長兵衛早太ゆり起し

の如き實に俗惡の甚しきものである、高倉宮に仕へた長谷部兵衛尉信連を、呼びやうもあらうに長兵衛など卑賤の稱を加へて、洒落たつもりでゐる抔は、是等も貶稱のハキ違へで、人をして不快を感せしむるものである、早太は源頼政の侍猪隼太である、頼政が高倉宮の御所へ密談に上がッて深更退出する際の樣をシャレに描かうとして失敗したものである、又類句と云ふより、寧ろ剽窃燒直しとも云ふべき句がまゝある

挨拶の度びに手拭肩をかへ

なぞの如きは、いかにもお出入の職人なぞが、得意先へ出掛けて行き、旦那に挨拶をして何か云ふ度びに、肩の手拭ひを時々左へやッたり右へやッたりして、話をするクセのあるもので、いかにも其擧動を穿ッてゐるが

挨拶の度びに簪場所をかへ

の如きは尤拙劣なものである、又

いかいとおばちやんがのと尻を割り

これは、女郎買に行つた男が、子供を連れて往ッた、ソコで子供は無意識に事實其儘を云ッて、綺麗なおばちんが澤山ゐたよと口走ッたので、隱してゐた女郎買の秘密が暴露したといふのである、これについて可笑しかッたのは、著者がまだ七八歳の頃親戚に放蕩家があッて、單獨で遊びに出ると喧かしく叱られるので、坊やをつれて夜店をヒヤかして來ると云ッて、出しに遣はれて青樓へ連れられて行ッた、成程おばちやんが澤山ゐて、可愛い子だことなぞと頭を撫でられたりしたことを覺えてゐるので、此句に對すると不尠感興を喚起すのである、然るに後世の句にこれを燒直して

隱謀露顯おばチャンがたんとゐた

とあるが、遙かに前者の妙に及ぶべくもあらずである
個様な例はまだ澤山にあるが、一々擧ぐるも煩はしいので、見合せて置
かう、ではあるが、通り句の中に

町内で知らぬは亭主計なり

と云ひ傳へてゐるが、『柳樽』には

店中で知らぬは亭主計なり

とある、これは傳者の改創を施したものか、又は訛り傳へたものかよく
分からない、又

下女鉢卷を締めねばならぬ腹になり

とあるを、後世、直して

サア事だ下女鉢卷を腹へ締め

とあるのは後者の改作の方が振ッてゐるやうである
引導のやうに義太夫序開きし

とある句を後世

義太夫の序は引導に殊ならず

としたのも同一だ
ソコで、今一寸通り句と云ッたが、通句の何物たるを知らぬ人に一言し
やう、通り句は歌で名歌とか俳句で名句感吟などいふ類で、昔からの狂
句で人口に一番膾炙したものを、通り句と稱して落語家抔がよく引合
に用ゐるものである、ソレはどんな句かと云ふのに

町内で知らぬは亭主計なり
サア事だ下女鉢卷を腹へしめ
辨慶と小町は馬鹿だナアかゝあ
嫁の年捨鐘程は嘘をつき
石塔の朱い信女が又孕み

車引女を見るとイキミ出し
その手代その下女晝は物云はず
相模下女イヤと冠りを竪にふり
辻斬を見ておはします地藏尊
目についた女房此頃鼻につき
河東節親るい丈に二段きゝ
透し屁で百萬遍の中ダルミ
現在の親のかたきに五分禮
白狀を娘は乳母にして貰ひ
講釋師見てきたやうな嘘を突き
貧すれば純子の夜具にねる娘

噺家は世間のあらで飯を喰ひ
辻番は生きた親父の捨て所
喰ふ外に信濃惡る氣のない男（信濃は信州の米呑き男なり）
女房の意見一分が薪をつみ
貧け將棋逃げるたんびに御手に何
親の脛かぢる息子の齒の白さ
孝行のしたい時分に親は無し
居候タバといふ字をよけて呑み
居候飯でも湯でもくれといひ
居候荒しの屋根を這ひまはる
居候三杯目にはソッと出し

發句にもならぬ松魚を伊勢屋買ひ
賣据と唐様でかく三代目
幇間持どらを鳴らして陣をひき
へんといふ逃路醫者はあけておき
色男金と力はなかりけり
正月はおのが女房にチット惚れ
得心をさせて質屋は繩をかけ
清盛の醫者は裸で脈をとり
女房のやくほど亭主もてもせず
銀烟管落した噂三度聞き
武藏坊兎角支度に手間がとれ

吉原が明るくなれば内が闇
地獄には虎が澤山ゐると見え
此外まだ澤山あるが、マッてんなものである
明治の狂句も、時に面白いのが無いではない、先年ある新聞に出てゐた狂句を亡父が譽められたのは

鐵道馬車伊勢屋始めて半區乘り

これは鐵道馬車の東京に布設された當時の句で一寸面白いものである

英廷をグラットストンとてろげ落ち

これは英國の宰相グ氏の辭職の折の句で、いかにも彼の忠孝主義の俗句などの比ではない、又亡父の咏まれたのは、驛遞局が遞信省と改稱した當時の事で

飛脚屋も出世、遞信省と成り

の句であッた、巳父は漢詩を學ばれた、至ッて嚴格の人であッたのは、某省の高等官は大體知ッてゐるが、時々こんな戯言をいはれた又某君の譽められた明治の狂句は

好きなヤッ造化機論を研究し

と云ふのであッた、成程造化機論出版の當時として面白い穿ちである、今日でも

好きなヤッ裸體畫計拜崇し
好きなヤッ戀愛詩をばぞ矢鱈咏み
好きなヤッ美的生活などと洒落れ
好きなヤッ發賣禁止計り讀み
好きなヤッ四ッ目屋讀本急に買ひ
好きなヤッゾラの小說燒直し

好きなヤッ婦人の何々抔を書き

等の弱點多き世の中、かゝる句例は頗ぶる多く咏まれることであらう、ではあるが目下團珍や文藝倶樂部、萬朝や二六などに見える狂句は一として見るに足りるものがない、新小說のがヤ、比較的に見られるのがマ、ある位である、嘗て『日本』に紫影子であッたか

原稿を破ぶいたで坊をはり飛ばし

といふのがあッた、末句少し誇大過ぎるが一寸面白いと感じたことがある

十、川柳の分類について

川柳は單に皮肉な罵倒をのみやるものと思ふと少し違うやうである、川柳の二大要素たる穿ちとをかしみの外に、古い川柳になると浮世畫的寫生とでも云ふのがある、ソレは皮肉罵倒や穿ちでもなく、又滑稽的擧動の寫生でもない、ツマリ詩的の寫生ではあるが、俳句としては餘り

に働き過ぎてゐる傾がある、ソウかと云ッて川柳は滑稽なりと云ふ定規から押すと、少しも可笑味はなく眞面目な句であッて、ソシて其句が活動してゐる、其一例を示せば

松明に工藤の夜具は三所焦げ

の如きもの、又

髪がよく出來て襷をヤッと越し

この句の如き、いかにも若い娘か嫁さんが、結ひ立ての島田なり丸髷が美事の出來で、これから仕事にかゝらうと云ふので、赤き襷などをかけるのに、髪を毀はすまいと、ヤットコサと襷をくゞるサマが遺憾なく表出されてゐる、ツマリ女の人情を穿ッたと云へば穿ちの部に屬するやうなものゝ、これは一の客觀美に屬するものである、又

牡丹一本を二人の子に泣かれ

この句の如きは、少し理屈臭いが全く川柳の領分外にあるやうだ

キャッと云ふ娘のあとを蛙飛び

この句の事も前に云ッておいた通り

坐ッてゝ嫁は着更てズット立ち

これはヤ、川柳の方に近いけれど、これもよく婦人の情と狀態とを寫してゐる、

かうしなと乳母破魔弓をヘウと射る

これもよく狀態が寫し出されてゐる

鋲打を据えて前後へバッと除き

昔の奥樣の鋲打輿を据えて從者が前後へバッと除く所の有樣がよく寫されてゐる、これも滑稽だの皮肉の穿ちに屬するものでない

其次きが穿ちであるが、これにも、只、單に其事物の特徴、卽ちある殊なッた點を捕捉して、滑稽でないのと、滑稽なのとがある

かけて來た程に娘の用はなし

は前者に屬するので、ホンの少しをかしいが

中直り鏡を見るは女なり

は後者の部に屬するものである、前よりは大にをかしみがある

病み上り喰はせずに置くやうに云ひ

なども大に可笑味を覺えさせるものである、此他千差萬別今一々に分類するに遑がないから、追々と合點されることにしよう

罵倒の方では

發句にもならぬ松魚を伊勢屋買ひ

はまださして振はないが

佛師屋をしても弘法喰へる也

の如きに至っては、そゞろ空海をして顏色無からしむるものである、又

馬鹿亭主ッナギの多い子を設け

などは今日、馬鹿紳商なぞに隨分多いではないか

又皮肉の方には

虎の鳴聲を聞かれて儒者困り

今では動物園や淺草の花屋敷の虎もねること故、さして困るまいが、何しろ何事も唐でなくては納まらなかッた、昔のチヤイカラには、確かに一本參ッたのであらう、又

狐付き鼠とまでは望みかね

いかなる狐付でも、これには一言もあるまい、ヤレ赤飯だ、牡丹餅だ、天プラだ、何が喰ひたい、かにが喰ひたいと、平生喰はぬものまで大食するので、これは全くお狐樣が憑いて召し上がると、俗人は妄信して終まふが、よく考へて見れば、狐の大好物なは鼠の天麩羅であるが、いかな狐付でも鼠の天麩羅が喰ひたいと云ッた奴がないのである

衣類までマメでねるかと母の文

思ひ當るニキビ黨もあるであらう（此句は嫁へ來た母の文なるべし）

てんぐに美い女房を持つ氣なり

天下必ずしも美人多からず、男子必ずしもエラからず、然るに各自皆必美人を得ん心持にて、初婚の者天下に滿てゝ、ソウ銘々に望通り美人無きは誰れでも知ッてゐる道理なるを、滑稽なりと云ふべき哉と、嘲ッたもの、大學出の新米學士などには多く此御注文があるやうだ

糠袋よッぽど顔を長くする

恐らくは美人の怒りに觸るゝであらう

晩あたりチット來給へ、どれも下手

云ふこと丈は圍碁の名人のやうなれど、初心の下手碁の中は、兎角こんなことを云ッて友人を誘ふものである、此句に對して一言もない譯である

滑稽の句に至ッては、別段に掲げて見ずとも知れてゐるので見合せた

十一、名句の評釋

川柳と云ッても、ソウくは面白い句のある者でないのは、和歌の數、昔から何百萬とあるけれど、その名歌と云はるゝものは僅少なるが如く川柳とても、『柳樽』に掲げたるもの、多くは意味平凡のものか、難解の句にして、會心の句は中々に少ないのである、其中で余が面白いと思ッた句に就いてザッと評釋を加へることにした

病人のみんな見て置く醫者の僻

この句の余に興を催させたのは、昨年の冬、赤十字病院へ二十日許入院した時、退屈紛ぎれの寄よりに、院長の診察振はかうであるの、醫員の黒岩サンは恐い顔をして、手術衣の隱くしに兩手を突込んで歩るくの、誰さんは姿が小さくて肩を張ッて左右に動かして、躍るやうに歩いてくるの、誰さんはドンな顔をして脈を取ッたのと、よく眞似をして笑ッたことがあるが、スッカリ川柳氏に穿がたれてゐるのを知らずにゐたのである

知る人に計子供が据ゑる膳

何か祝事かなぞで、知人のもとに御馳走に招かれる、スルとソコの中の人手でも足りぬ時なぞに、小兒にお膳を出させると、小供は自分の知ッた心易い人計へ先づ膳を据ゑて逃げ出すのを云ッたもの、何となく無邪氣な可笑味を捉へたものである、これに就いて一言したいのは、昔は今程人を馳走するにも、料理屋で宴會をしたり、藝妓を招くといふとは割合に少なくッて、多く自宅で酒宴をし、花嫁の琴とか、子供の給仕とかで、至ッて家庭の趣味に富んだことが知れる

代脈は何をていつの氣で見せる

代脈となるとタトヒ先生よりも上手であッたにしろ、病人の方では、何だ此ヘボ代診めと腹中で嘲ッて脈を見せると云ふ丈だが、代脈の句としては一番に振ッてゐる

何所からか出して女房は帶を買ひ

女と云ふものは心掛のよいものかして、必ず何所かに多少の備荒貯蓄をしてゐると見えて、亭主は貧乏で火の車で窮してゐても、女房は秘藏にした貯金で帶を買ふと云ふまで、只何所からかの初句が此句の生命である

内談と見えて火鉢に顔をくべ

他人に聽かされぬヒソ〳〵話、火鉢を中に差向ひの姿勢も、話の進むに從がひ、漸次前へ屈みて互に、或は火鉢の灰の上に、火箸もて文字を書きつゝ話し合ふ樣見るが如きものがある、「火鉢に顔をくべ」の云ひ方至妙にして、よく其實況を適切ならしめたのである、他にも、「内談に火箸を一本貸してやり」の句がある

親父まだ西より北へ行く氣也

若い息子の放蕩は、此時代にありて普通の習慣なるに、最早隱居親父の西方極淨土へ行く願ひを起こすべき年齢なるにも關らず、年はとッて

も浮氣はやまぬの俗諺をして、うべなはしむ、まだ北廓へ遊ばんの志、壯志暮年猶未休もの

探がし出すたび伸び上る猿轡

ある田舍寺、大黒もあり、子供もあるであらう、可なり有福の評判ある寺、人家と一寸かけ離れてゐるので、或夜二人の强盜が押入り、和尙始め後ろ手に繩をかけ、柱へ縛ばりつけて、聲を立てぬやう手拭で猿轡をはませ、サテ悠々と方丈の箪笥を曳出し衣類を出し、或は戸棚をあけて搔捜がす度び毎に、和尙は聲をも立てたけれど、ソレも叶はねば、金錢の在所を知られはせまいかと、度々伸び上る其樣を遺憾なく寫し出してある、尤これは和尙とも別に限ッた句ではないが、『早鐘に和尙を見れば猿轡』と云ふのがあるので、思寄せて解釋して見たので、和尙の坊主頭の方が猿轡で伸上るのに調和して、一寸滑稽を覺えさせる

相惚れの仲人實は廻はし者

自由結婚なぞは、夢にも知らぬ幕府時代、親と親とが承知せねば、結婚の成立しない當時、かゝる輕便法もあッて、往々自由結婚の實を擧げることもあつた、近來の新詩人にも時々これに類似した噂さがあるやうだ、又「仲人の跡から出來る面白さ」の句がある

化物の話を儒者はシッ叱り

化物話ほど詩的で、趣味のあるものは無い、ソコでよく熊さん八さんの問題にのぼるものであるが、怪力亂神を語らずといふ論語の成文に從つて、何でも孔子樣はお化の話をなさらなかッたと云ふので、頭から儒者殿怒ッて叱り飛ばす滑稽を、揶揄したものである

放し龜一日宙を泳いでる

余が子供の時、一日庭上に可なり大きな龜が這ひ出て來た、いづれ近所から逃げて來たのであらう、嬉しがッて捕へた所、祖母さんがソレは靖國神社の池へ放してやるがよい、と云ふので、急に酒を買ッて來て呑ま

せてやつたりして、明日放してやるが、ソレまでに逃げると可かぬと云ふので、二枚糸で縛ッて椽先の廂に吊して置いた、スルト龜先生のんきにも手足を出して泳ぐやうな風で一日ブラ〳〵としてゐた、此句に對して當時の光景を想起して、其放し龜の狀態を目に浮かばせる、一日宙を泳ぐの機警なのと、こんなツマラヌものまで觀察する力とを思はねばならぬ

香の物程に刺身を女房きり

昔は今日の樣に、肴屋が直ぐ魚を調理して置て行くと云ふ事は無かッたやうに想像される、今でも北海道へ行くと肴屋は只魚を賣る丈で、こしらへては行かぬそうだ、ソコで細君が刺身をつくると、澤庵の香物でも切るやうに厚く不格好にキザムのを云ッたもので、これに就いても細君第一の條件として調理法は心得ねばならぬものである、長崎地方では料理の一通り出來ぬものは、花嫁たる資格が無いそうだが、目下學

校出の海老茶式部に、家庭の趣味などいふ理屈許矢釜しく云ッて、一向亭主殿の舌を喜ばせる程の味加減を知らぬものが多いのは慨歎の至りである、併し赤堀さんの料理法で、口取やキントン許上手に出來ても仕方があるまい

思案するやうに重荷を背負ッて行き

別に解釋を要する句でも無いが、單に重荷を背負ッて行くのを、思案する時の態度に思ひ及ぼした喩が巧なのである、余時々暑を箱根に避けて、姥子に滯在したが、彼所の豆腐屋の爺さんが、旅人の荷背負ひを片手間商買にしてゐるが、丁度重荷を背負ッて、大地獄の險を越える時の姿なぞを思ふと、いかにも道々何か考へ事でもして行くやうで、其見立て方のうまいので、此句を取ることにした

指さしで座頭に教へ笑はれる

電話にお辭儀をしてサヤウナラを云ふ滑稽と同一である

縫箔屋のびをしてから飯を喰ひ

一日俯向いて仕事をしてゐるから飯時になると、先づウウンと欠伸をしてから、飯を喰ふと云ふ丈であるが、個樣の特殊の人の僻を捉へるとは川柳の妙である、「針妙は返事の時にッイとこき」も同一筆法である

町内でみんな忌服のある娘

「みんな忌服のある」當世の「親類筋」と云ッたやうな面白い云ひ方である、近頃の女詩人などには「社中ではみんな忌服のある式部」などがアリヤアしないか

切張も袴でするはキット下卑

切張は障子の切張である、袴は禮儀に關するものでありながら、袴をつけて障子張をすると、どうしても居候の書生のやうで下卑ると云ふのである、これは障子の切張と袴との調和せぬものであるものを證據だてゝねるまでだが、こんな所まで其調和不調和の研究をつんでゐるのが、感心すべき點である

手習子かへると鍋をのぞくなり

青鼻汁を垂らして、手足まで手習をした男の子、寺小屋から歸ッて來て、イキナリ臺所へかけ付けて、芋の羹轉ばしでも摘まもうとするので「鍋蓋に一切れのせる忙しなさ」などの句もある、當世の小學校生徒は行儀がよいからこんなことはあるまい

懸り人寝言にいふがほんの事

「懸り人」後世は「居候」明治では「食客」などと云ふが、初代の川柳時代寶暦明和の頃には、まだ「居候」など云う言葉が出來ないのと見える、懸人卽ち居候の句は實に澤山なものだ

かゝりうど質屋の使ひ巧者なり

かゝりうど疱瘡をした餅を喰ひ

かゝりうど洗濯をした飯を喰ひ

無い筈はないと跡から倉へ行き
おさらばを宵にしておく宿下り
やわ〳〵と引立てゝきく葡萄の値
里の無い女房は井戸でこわがらせ
珠數袋嫁輕薄の始めなり
愚痴話送ッて出るも小半時
立そうにして又話す女客
嫁のつまゑんやらやッと五寸あき
飲まぬ客一寸々々と酌に時をきゝ
煤掃に一人二人は馬鹿ななり
綻びの内、炬燵から首が生え

どうも今の家に厄介になッてゐても宜うございが、二疊の所へ三人寝て、晝間は子供がうるさく來るので勉強が出來ません」の語を思ひ出さしめた

一人もの胴震ひする飯を喰ひ

一人ものは獨身者で、細君の無い寡で、ソンナに御叮嚀に云はずとも、分かりきッてゐる次第だが、一人ものは、冬にでもなると一日分位の飯を焚くのは贅澤と面倒臭いと云う譯から、一度に二日分位焚くので飯も冷飯を通りこして、氷飯となッてゐる、ソレを外出先から戻りきて、火鉢に火は絶え、鐵瓶の湯は水と變じてゐる、ソコで其氷飯に冷めたい湯をかけて喰ふから、胴震する飯を喰ひと云ッたものである、一人ものゝ句は川柳の中でも、是亦一個有力の詩材である

一人ものヤレ茶をくれろ火をくれろ

一人ものヨイヤラさッところり寝る

一人もの綻び一ッ手を合せ

一人もの店賃程は内に居ず

屁をヒッて可笑くもない一人もの

用向の隣へ溜まる一人もの

香の物へし折ッて喰う一人もの

香のもの隣へ漬ける一人もの

寢所ろをへシ折ッて置く一人もの

綻びと子と取かへる一人もの

一人もの、滑稽なのは、如上の句でも分かるであらう

男の子裸かにすると捉まらず

男の子は、裸を好むもので、いたづらであるから、裸かにすると喜んで馳せ廻るものであるが、衣服を着ぬと風邪をひくとか、轉んで怪我をする

恐れがあるので、捉へて衣服を着せやうとするが、裸であるから中々捉かまらぬ、手を捉まへれば、挫く恐れがある、サリトテ首を押へる譯にも行かずと云ッた場合で、此句はいかにも五ッ六ッの男の子の特徴を捕捉してゐる、類句に「裸ッ子腹を叩いて逃げるなり」

指二本額へあてゝ下女は逃げ

主人が下女を口説くと云ふことは、頗る不倫な話で、人に惡感を抱かせるものであるのに、一たび川柳の爲に滑稽化されると、毫も惡感を喚起さないで、非常に無邪氣な滑稽を感せしむるものである、後世の川柳となるとかういふ手際には行かぬやうである、細君が嫉妬するであらうと云ふのを、擧動的に鬼になるであらうと云ふ風を示して、指を角に擬した下女が不承知抔と云ふのは、至極面白いではないか、されば其内容は淫靡なことでも、不都合なことでも、其詠方によッては、美感を喚起することが出來るのである、此等の巧妙なる手腕は他の文學の企及すべき

所ではない

母の名は親父の腕にしなびて居

當節柄こんな親父はないが、昔しの職人とか仕事師とか云ふ若い者は、娼妓抔に夢中になッて、其女の名を腕に彫りつけて得意がッたが、若い内はお互に色氣もあるし、體格も美事で膏がのッてゐるから見られるが、サテ老さらぼいた親治となッて、其しなびた腕に戀女房の名が皺々チヤに殘ッてゐる抔は滑稽至極だ、川柳黨の觀察を經ては何ものでも、皆滑稽化されて終まふ、いかなる戀愛神聖論者でも、此句に對しては顏色はあるまい

病とは相模に酷い評がつき

相模の國から出る下女は、皆助平であると云ふ相場が極ッてゐるやうになッてゐるが、さりとてあの下女の男好は病氣のせいだといふ評は酷評であるとの事、今の戀愛詩人にも病だといふ酷評を受ける人はあ

るまいか

一匹の相模に雄が五六匹

罵倒し得て痛快である、一匹の海老茶に雄が五六匹、一匹の娘義太夫に雄が五六匹などは目下も流行だ

下女文を讀んで貰らッて憤り

近來の下女は、兎に角『日用女文章』の一冊位は持ッてゐて、他人に手紙を讀んで貰ふのは先づ無いと云ッてもよいが、昔は總て無學が多かッた、ソコで關係した男の文を讀んで貰らッて、其薄情を憤つた所を捉へたもので、句法も面白い所がある、下女の文は是亦川柳黨の詩材とする所である

下女が文恰も話する如く

言文一致黨は喜ぶ句である

下女が文梵字をひねるやうに書き

下女が文飯の足らぬをおもに書き

下女が文書いては喰ッてしまふ也

清書にチット小さい下女の文

此三句の内でも、書いては破ぶり、破ぶッては嚙くだく樣を寫した一句が一番面白くよまれる

中直り元の女房の聲になり

夫婦喧嘩、大にお長屋の一同を騷がして摺古木飛び摺鉢舞ひし一幕濟んで、サテ仲直りとなるや、今迄殺さば殺ろせ抔ワメイた山の神も、再びモトの女らしい聲になッたと云ふので、女性の特徴を巧に捕へたものである、元の女房の聲」で今までの金切聲でワメイたのを想像せしめた手段は巧なりと云ふべしである、『中直り初手に笑うは耻のやう』これも人情の然るべき所を穿ッてゐる、又『中直り鏡を見るは女なり』

武者一人叱かられてゐる土用干

甲冑を帶した所へ暑氣見舞

暑氣見舞枕と團扇持ッて逃げ

下女肌を入れどうれ〳〵なり

皆暑中の滑稽である、武者一人の句は奇警とも云ふべきものだ

茄子賣はこの〳〵がしまひ也

茄子賣の特色を捉へたもの

米つきは一杵に首二ッふり

じれつたいお子だと守は二ッゆり

「米つき」と「子守」との擧動の特點、同じく二ッであるが共に適切なるを思ふがよい

拔けた櫛四五へん跳る琴の上

かやうな點にまで注意するのは感ずべきもので、四五へんは適切なる

は云ふまでもない、但滑稽の意は少ない

よく聞けば自らといふ年でなし

昔なら路考とか半四郎とか云ふ女形、舞臺の上ではいかにも窈窕たる姫君か御臺樣、自らは抔と云ふと、人をして恍惚たらしむるが、よく年を聞けば五十から六十才以上であッたりするのを云ッたもの、今の女小説家女記者女詩人なぞに此組があるよ

汝等は何を笑うと隱居の屁

耳の遠い隱居サン、澄まして屁をコイて知らん顏、女子供の笑うのを見て、汝等は何を笑ふの抔云ひそうで、いかにも澄ました隱居が目に見えるやうだ、これも笑ふべきものと、冷靜なものとの取合せで妙を覺えるのである

業平の瘡をかゝぬも不思議也

川柳子曰く以て謹んで○○子と○○君とに、此句を奉呈する

吾が好かぬ男の文は母に見せ

戀愛詩をよむ海老茶式部御たち、いかゞおぼしめすか

隱くす文ぬからぬ顏で鶴に折り

小娘には油斷のならぬとは此事である、まだ澤山あるが、一々評釋を付するまでもあるまいから、只句のみを示めすとしやう

十二、川柳點抄　上

是迄に洩れた、面白い句を集めて見やう

夜蕎麥賣ふるえる聲の人だかり

念佛も四五へん入れる鰌汁

琴一ッおッくうに瞽女廻るなり

股のありッ丈座頭の坊またぐなり

とッさんの生醉ヤイと母へ逃げ

かゝりうど覺悟して喰ふ初松魚
かゝりうど此かゝあとは思へども
かゝりうどあのね〳〵を五月蠅がり
かゝりうど數の子などは殺し喰ひ
かゝりうど一ッ巴のやうに寢る
懸り人立派に出來る疊だこ
向ふから硯を使ふかゝりうど
かけ針の場をかゝり人相務め
人魂のいちけて飛ぶはかゝり人

以ていかに懸り人の實際の憎稽なるかを知るがよい、かゝりうど此かあとは思へども」の句を誦しては、友人某ドクトルが嘗て食客をした時の懷古談を思ひ出し、かゝりうどあのね〳〵を五月蠅がりは知人が、

小姑め母が歸るると側へ寄り
火の見番人の拾ふを見た計り
禪宗は座禪がすむと蚤をとり
首と首寄せて讀んでく土手の文
燒飯を頰張ながら餌サをつけ
土用干せつッく内が娘なり
我頰を撫で〳〵刷子を借りて行き
五月蠅くてどうもならぬと雛を出し
吾が持ッた財布の紐でしめられる
叱られた娘其夜は番がつき
朝歸り命に別義ない計り

朝歸りだん〳〵家が近くなり
目をふさぐ手を遠くから持ッてくる
女房のとッつくしまは價が高し
我腹がへると子守は歸へるなり
將棋をば二番負けては金を借り
酒樽へ四角に下戸は穴を明け
取次の四五文落す氣の毒さ
國家老ペンペコペンを先づおさへ
懸取の云譯川瀨喜内する
そこら中見合せ平の蓋をとり
禿來て箪笥へ深く手を入れる

願はくは嫁の死水とる氣なり
早くサと計は紺屋屁ともせず
岡釣は竿を踏まへて摺火うち
寢てよんだ文眞中で起き上り
化物の部に這入ッてる御差料
病上り喰はせずに置くやうにいひ
白狀を娘は乳母にして貰らひ
眞ッ直ぐに白狀をする五月目
彼の女房すんでに己れが持つところ
泊り客近所ではもう何んのかの
女房はねッから俗な事をいひ

京女立ッて垂れるが少し疵
女の詩、歌よりどうか憎らしい
仲人の夫婦笑が上手なり
仲人は雨まで譽めてかへるなり
强ひられてあたる炬燵は畏まり
後ろから美い顔の出る鏡研ぎ
能い娘母も惚れ手の數に入り
叱られた通りに母は叱かるなり
お内義の受取發句書いたやう
こねとりは尻の痒ゆきを持あまし
花の留守此ザマはへと片づける

女房の留守押入れへおッつくね
ソリャア出たと小供の騒ぐ居酒店
櫻から生醉腕をこいで出る
生醉はもたれかゝるがきつい好き
生醉の内は去られた分になり
家内中出て生醉を落手する
鵺程に騒ぐを聞けば毛虫なり
女房が出ると話が野卑になり
女客猫から先に暇ぐひ
女房は途中で逢ッてさえぬもの
不景氣なお子だと乳母は木戸を出る

見る空はないと棧敷でねんねさせ
嫁の髪巳午の間にヤッと出來
元結紙目をムキ出して下女は締め
今喰へばよいと無氣味な刺身うり
七種を娘は一ッうッて逃げ
捨てる藝始める藝に羨まれ
惣領は尺八を吹くつちに出來
尺八は衣裳のよいがイッチ下手
虚無僧は嬉しくもない貰ひ振
約束を違へぬ紺屋あはれなり
お賽錢内儀胸からシボリ出し

女房に詔らひ過ぎて氣取られる
煙管は無いかなと股倉へ手を入れる
刎ねられて貞女樣だをしほに立ち
書置を見れば不孝も知ッてゐる
なりッたけ追かけて見る切れた凧
留守かなと見くびッて行く大晦日
あらかじめ悟ッて女房へンなり
腰元は雨戸くるたび怯かされ
腰元は讐持とて床をかへ
師匠樣一畝づゝにねめまわし
少し名立つも嬉しい若盛り

鼻毛拔き堅くつかんで馬鹿な面
初の雛亭主騷いで叱かられる
泣ながら眼をくばる遺物分け
唐本は駕輿に乘る時計り入れ
乘るもんじやないと馬場から跛出る
高倉の宮だと馬場でなぶられる
ぜうだんに呑ませ嫁はくッつかれ
夕立のたんびに仁者貸しなくし
一本傘貸して小言で内にゐる
二人目は女房の傘を貸してやる
此味噌はいくらめすると嘗めて見る

琴爪をちんぼうにはめ叱られる
柏餅餡をくじッて叱られる
子が辭義をせぬで遲々する暇乞ひ
拍子木に嫁居直ッて口をふき
女房の先へバカーアな男行き
何所へでもクッ、イて出る馬鹿亭主
貸さぬ奴種々物入をいひたてる
柳橋出ると一舵ぐッとやり
不承知な下女澤庵で喰らはせる
牡丹餅の焦つき御用二ッ喰ひ
唾してあるくが酷く醉ッたやつ

御湯殿でソチも這入れとおじやらつき
碁の助言云ひたくなると庭へ立ち
捜がす文こんな物かと一寸見せ
船の酒體を堅めて丁とうけ
股へ褄挾さんでこぼす糠袋
肴賣四ッすぎ迄はエラを見せ
談義場を後家憎い程取廻し
ぬかる道飛ばれる丈は飛んでゆき
灰吹を持ッて見たてる捨て所
呉服屋の通ひ山師の家へかけ
知り切ッてゐるに鶺鴒馬鹿なやつ

牡丹餅の摺古木置き所に困り
娘まう筆をかくして遣ふなり
娘まう脇の下から用を足し
大當り喧嘩幾つか掴み出し
此所が火と日なたの火入敎へられ
雨宿りちょッくと出ては濡れて見る
近づきを考へてゐる雨やどり
本降りになッて出て行く雨宿り
侮ッて藝子合の手なしに彈き
寢てからの聞耳枕二寸あげ
十三日番頭白いザイをふり(煤掃)

番頭は首實驗をして廻り
覗かれて顔を突込む耳だらひ
牛方は尻へ廻はッて叱かるなり
牛方のあきらめてゆく俄か雨
意見きく息子の胸に女あり
女客膳の間に本が出る
惚れてゐる丈が女房の弱味なり
歌がるた嫁こまや程つんでおき
元船で大の男の針仕事
女房の謠よッぽどひどく醉ひ
小便に起きて女房は碁を叱り

あの嬶てわいやッだは懲りたやつ
一ッの富何所かの者が取はとり
話でもしなは淋しい月見なり
糠袋二番出しにて母洗ひ
抱かれなと嫁ひッついた乳を出し
借りた子に乳をさがされちゞむなり
新世帶お姫樣だと誰か云ひ
行水の戸板へ日なしはたるなり
田舍下女眞綿といッそ掴み合ひ
タワケメと云ッては髯を二本拔き
云ひ置けばよいにと履の紐をとき

大喝一聲竹の子を捨てゝにげ
鹽梅を家中させる下手料理
芋の皮モチットにしてヒョクラ拔け
三度笠村一番の手書きなり
生醉に二度目の棒も又取られ

十二、川柳點抄　中

八兵衛は女おシナは男なり
山伏にたび〳〵化ける源氏方
女房は穢ない夜具に一人ねる
聞く人の心で五割引いておき
御不勝手どうれ〳〵の作り聲

影法師捉らまへたがるぐわんぜなさ
恨みいふ下女井戸繩の毛をムシリ
おとなしくなると目付が惡くなり
出來ぬヤッおよしなさいと堅くいひ
こッそりと睨める娘洒落れた者
此裏に何とも解せぬ娘あり
よい女どこぞか女房きづをつけ
女同士何所しかアラを見出し合ひ
惚れ藥十日すぎても沙汰はなし
請人と人主のある御新造
竈は下女が戀するおしまづき

美い男貧乏神の氏子也
出代の涙にしては翻しすぎ
駒下駄の本音を吐くが妾也
御妾の疵は鼻から烟を出し
話のはアレかと跡で舌を出し
美くしい手のかけ廻る琴の上
掛物のやうに妾をとりかへる
肝煎の茶臺で出すが妾奉公
出代で娘の戀の橋が落ち
御供待、帶が解けたとふり向かせ
子を持ッて近所の犬の名を覺え

品川へ來て思ひ出す事ばかり
一箱を息子十度にぬすみ出し
旅の留守内へも胡麻の蠅がつき
へコまれて使の困る菓子袋
川を越す女一寸づゝまくり
里芋の本阿彌下女が罷り出で
湯殿から忘れた時分嫁は出る
御宗旨にやるぞ〳〵ととうにたて
御外戚ついて歩るいた婆也
船頭もアトの婆は義理で抱き
足音がすると話の題をかへ

芥溜の鶴鋲打に羽を伸し
ふんばりのやうに磨くと姑いひ
是計り着てきやるのと里の母
それ計り着て出やるのとモウいぢめ
メリヤスは女の愚痴に節をつけ
叱られて娘は櫛の齒を數へ
片眉を落すと嫁は手でふさぎ
唐瓜割る娘金剛力を出し
一思案ありと藪醫者こわいこと
禮もせぬ僻に藪醫の何のかの
代脈はヤンマを逐ッた小僧なり

銀烟管銀のやうだと親父いひ
見合ひした日だと去年を嫁笑ひ
子が一人出來てそれなりけりに成
口紅の時、口唇にソリをうち
案内者テニハの合はぬ歌をよみ
息きがキレますと鋸かしてやり
年寄がよると話に砂が降り
祖師堂を先づお七が出吉三が出
耳のわき搔き〳〵お七側へより
疝氣をも癪にしておく女形
首はまだ舞臺に置いて湯に這入り

幽靈は握り拳で引戻し
立身をした馬申上げまする
賣られてもお輕矢張名をかへず
旅芝居小町茜の袴を着
宮芝居いかにも曾我が貧に見え
鉢卷をせぬと助六大神樂
葛の葉は破れた所をよけて書
振袖の胸打を喰ふ濡事師
井戸替のやうに五郎を曳出し
兄嫁も芝居願ひはグルになり
見世物の太夫といふは鼠なり

鼻唄は己のが勝手にふしをつけ
ちぐはぐの顏は貰らッた棧敷なり
兩の手で欠伸をぐッとさし上げる
餘ッ程な厄落しだと湯屋を出
さうであらう〳〵と里の母
長尻と狸寢人の魂くらべ
たいそうもない道サと按摩もんである
うたゝねの腰から下は女なり
安隱居溝をさらうを役目にし
女房を呵り過でして飯を焚き
新道は話の中の人通り

四五日は嫁が〳〵を吹聽し
牡丹餅にかどのあるのは貰ひ物
張物をハヅすに胡麻のはねる音
張物を生捕りにする俄雨
仲直り疵のあるのが飲んでさし
冷飯を平げて行く下女が母
掛合にうわ言をいふ將棋さし
古道具屋鍔をなで〳〵送ッて出
發狂(きちが)ひは繪にかく時は笹を持ち
清書に知らぬ字のある親の顏
のどが餅につまりましたと書いて見せ

思案する肩に一筋繩すだれ
上下を着るとネジつて鼻をかみ
敷のしの上に胡坐の飼殺し
呉服屋は肩揚のある返事をし
草履取艫へ取付いて叱られる
口を酸くさせて花嫁腰をかけ
背中へも手の及ぶ丈嫁はぬり
泥だらけ土産は捨てずして歸り
水汲みは小べり計の舟にのり
卷紙はひよッと落すと逃げるなり
撥鬢をみんなが笑ふ祭りすぎ

片目だが器量はよいと仲人いひ
あッたら後家を只置くと知らぬヤッ
恐れ入りましたと琴を片付ける
未來記で見れば高時肴なり
面白がッて子のくゞる土用干
狐つり猫がかゝッて餅につき
繪の所が出て讀み本を子に取られ
唐詩選讀むと孔雀の尾がほしい
云草にしをると論語取上げる
寢忘れた下女は矢鱈に薪をくべ
家賃より高い染賃着る女房

あらッぽい仲人をする庄之助
土俵入負けるけしきは見えぬなり
胸化粧一人角力のやうにぬり
スカ屁ではチト不似合な角力取
角力場に氣のない男頰杖し
角力好女房に羽織斷られ
ひいき角力勝ッたので風邪をひき
夕涼なげるな抔と角力とり
大きな男褌ねだるなり
關取と嫁同年でをかしがり
同くを四五人で持つヘボ角力

膝へ寢た子と思はれぬ角力取
中のよい嫁はお經をよみ習ひ
木綿賣乳母が見るうち抱いてゐる
物指で雪をつゝ突く日記づけ
お内義の手をおんのける鰯うり
物指で晝寢の蠅を逐ッてやり
俎板を烟草の時に削らせる
鉋屑大工嚙み〳〵研いでゐる
毛拔賣我れのを一本ぬいて見せ
まう嫁は二把で五文を買ひ習ひ
そゝり唄兎角に跡へトサをつけ

すぼまッて馬から下りる宿下り
屋根ふきは四五寸さきも一ッうち
摺鉢に舞をまはせるいくぢなし
若い者頭かき〳〵かしてまり
拔足で飯櫃を出す夜手習
仰向いて見ては米つきひだるがり
野雪隱地藏しばらく刀番
物申に窓から顔が二ッ三ッ
取次の出る内袴のひだをのし
供廻り鐘つき堂を追出され

十二、川柳點抄 下

烟管にて寄せる屏風のもどかしさ

冷飯を見い〳〵内義米を出し

ねんねこの腰は左右へ少しふり

三聲目の頼みませうは草履取

亭主から物を云ひ出す朝がへり

女房を持ッて朝寝に疵がつき

猪の早太歯をムキ出しておどされる

娑婆以來これは〳〵と反りかへり

兩袖を探がして後家は珠數を出し

ことづかる文で頬など撫て見る

二三町女のはだし評がつき

狸汁、化かされたのが一チの客

（評に曰く「宮崎來城の無錢旅行中此實驗談あり」）

鳴子曳き子のあいそうに一ッ曳き

一人客給仕と話し〳〵喰ひ

内のもの宜しくなどゝ作を入れ

外科の供兎角委細をきゝたがり

車引、橋で酔興者をまち

あいにくといひ〳〵飯を借にくる

女房を畏がる奴は金が出來

武藏坊水車程背負ッて出る

一分だけ遣手は尻をドタつかせ

さりながら打つにはましと甘い母
田舍乳母駕籠で二三度へどを吐き
里歸り夫びいきにまう話し
損金の世間へ知れる瀨戸物屋
談合はとッつき安い顏へいひ
乘物へきつい山師と指をさし
湯淨瑠璃着物をきるとケチな聲
どッしりと置いてから云ふ白の禮
師匠樣親類書きの伯父に成
れい〳〵と追人の中に聟の顏
嫁せつける嫁は炬燵へ腰をかけ

犬を逐ふ棒は投げるがしまひ也
ぶちまけて二足逃げる炭俵
芋の皮でもむかうかと邪魔に成
後ろ疵うけたで弟子は皆離れ
來た月を入れてはつ〳〵位なり
產揚句夫ト遣うが僻になり
張物の大蛇に見えるつむじ風
猿廻しつかんで出ると肩を出し
乳母が灸側に泣人がついてゐる
皮切は女に見せる顏でなし
女房の留守も中々おつなもの

尺八で五ッたゝいておッ放し
料理人研ぐ内鯉を泳がせる
餌を拾ふやうに居眠る鳥甲
能い年をしてとは事の不首尾也
錢の無い非番は窓へ顔を出し
親方の系圖をきけば樽拾ひ
車引釣瓶でのんで叱られる
乳母が親熊手のやうな手であやし
御輿脇鐺をはねて何かいひ
燈明を嫁は二人で消しにゆき
女房に髯をぬき〳〵叱られる

盜人に法螺貝をふく在郷寺
摺古木で鶩を仕舞う鳥屋店
簪でかき〳〵嫁は質を貸し
雨滴れを手へ受させて泣やませ
こわそうに膝へ手を置く精巧平
かしましく階下に並ぶ雛の客
雛壇の鵜越を鼠來る
玄關番遠吼え程な欠伸をし
玄關番ドッシ〳〵と三ッ下り
取次の四五文落す氣の毒さ
取次ぎに覗いて見るは女なり

ひきがへるノタリ〳〵と罷り出で
角兵衛獅子五百が舞ッて立眩(くら)み
山の手の目見えは井戸を覗いて見
轉寝(うたね)の顔へ一冊屋根にふき
まん丸く嫁菜の殘る犬の糞
涼臺天はどうした物といふ
初松魚　山時鳥　嫁の禮
客い伯父一年ぎりの鎗をくれ
次男にはへロ〳〵武者に慰斗をつけ
金持と見くびッて行く初松魚
竹の子のやうだと揚げをおろしてゐ

見せずともよいに大刀賣ひらりぬき
索麵は皿の中にて袖だゝみ
添乳して棚に鰯がぢざりヤス
浴衣はいやだと娘降ると出ず
もてぬやつまだ藥でもヤル氣也
若い者片手握ッて呑んでゐる
舟緣りで虱をつぶす麗かさ
ぢみ〳〵の中の白壁質屋なり
料理人氣のへる程に屑を出し
手の平へ喧嘩をのせる切落し
狂人(きちがひ)の膳は遠くへ据ゑて見る

猪にくさめをさせる糸薄

ワキ僧は烟草盆でも欲しく見え

ワキの僧引込際のてれたもの

桃の花下女が迎ひの馬につけ

己れもよい男と瞽女をくどくなり

上下の音計きく綿帽子

女房を大切にする見苦しさ

初松魚内義こわ〳〵百に付け

和尚様草履取にも御手がつき

麥飯とかいて榎の木へ立かける

かゝりける所へ亭主戻ッたり

餘ッ程の間かと晝寐は目を擦り

空寐入あまりいびきが律義なり

名月に御用發句をしたといふ

口唇がはれたと袖を取ッて見せ

首縊り面當てにとはたわけ者

借馬引腿まで出して乘ッてくる

驅けて來た禿しばらく耳に口

黑い毛を拔いたが嫁の落度也

口說くやつあたり見い〳〵側へ寄

口へ手を當るが口說きじまひ也

洗ひ髪握ッて袂見てもらひ

當分は並らんで喰ふの耻かしさ
ソリヤ〳〵と座頭に反吐を跨がせる
笑ひ止むまでは高座で汗をふき
上下をつまんですわる暑氣見舞
おらがヤッ何と云ッたと連れにきゝ
土手で逢ひ何所へ〳〵と手を擴げ
小間物やおめかと帳に付けておき
賴政が死ぬと假橋願ふなり
さッぱりと書いて呉れなと見くびられ
乳母同士對決になる柿一ッ
田舍乳母全體無理な髻を出し

惚れたとは女の破れかぶれなり
母親の異見拜むが仕舞なり
置炬燵話を奥へつれてゆき
杵へ茶を置いて米つき汗をふき
父親が拾へば文も靜かなり
大三十日世間の義理で碁を休み
米つきの明かるみへ出る一つかみ
伏勢のあぶれはノロリ〳〵來る
戸隱は油のねだんグッと下げ
戸隱も神樂の間ひは髭をぬき
福祿壽お辭義の時はあとずさり

猿田彦鼻を握ッて汗をふき
洛中はそれとも知らず蚊帳をつり
神の馬敬ふ施主に屁をかゞせ
船頭の居所にこまる寶船

十三、川柳と風俗

以上の句外にまだ收錄すべきものも多いが、こゝには一斑を示す丈に留めて置かう、ソコで川柳にまだ一の長所があるが、これは文學外に亘るものであるから、餘り論ずる必要もあるまいが、ソレは德川時代の風俗の變遷を知ることが出來ることだ、ソレに其時代の流行や人情なぞも此川柳に依つて多少を知ることが出來る、昔し加茂眞淵は『古事記』を研究するには古語に通じる計でなく、併せて古意に通せねばならぬと云ふので、頻りに『萬葉集』を研究したそうだが、國文家など世に云はるゝ

先生方も是非川柳は研究せられたいもので、川柳を輕視した結果が、忽ち四ッ目屋讀本抔の失策を仕出かすものである、例へば

杵へ茶を置いて米つき汗を吹き

など云へば、昔は屋敷では米搗を雇ッて米をつかしたことが分かる

桃の花下女が迎ひの馬につけ

なども、今のやうに慶庵から下女のくる殺風景と違ッて、頗る詩趣がある

初松魚内儀こわ〳〵百につけ

昔しは初松魚は非常な高價な者で、只今のやうに肴屋も切賣にはしない、ソレ故尙以て普通の者の口には上り難いものであるが、借金を質に置いても一番喰ひを誇るのが、江戸ッ子としてあつたものであるは、誰れもよく知ッてゐる事實だが

あさつきのなます進んぜて猿轡

となると一寸分かりにくい、アサッキと云ふは細き葱に似たもので、此鱠を三月の節句時分に造しらへる、ソコで其アサッキ鱠をお雛様に進んせて、紙切れにて顔を包み箱の内に納ふのを云ふたものだ、又

十三日番頭白いザイをふり

余も最初此十三日が分からなかッた、ソコで叔母に聞いて見た所、舊幕時代には十二月の十三日は江戸の御城内始じめ市中は勿論東海道筋まで、十三日には必煤掃をすると定まッてゐたので、其日には市中一般何を置いても煤掃をするのであるから、出産のあッた場合には弱ッたことも有るとの事である、ソコで此句の意味もよく解し得て其滑稽な云ひ方を面白く感じたのである『山谷堀船で子の泣く十三日』などいふのもある

師匠様一畝づゝに睨め廻はし

この句は云はずと知れた寺小屋で、舊幕時代の小學校、『手習子歸ると鍋

をのぞくなり』など對照すると、いかにも余が子供の折が思ひ出される、近頃の幼稚園の生徒などを見るにつけ、隔世の感が生じる

御供待帶が解けたとふり向かせ

かやうな句は、今でも供待車夫などが、退屈紛ぎれにソコを通りかゝッた女中に、姉さん帶が解けましたよ抔と詐ッて後ろを向かせるのであるから、さして趣味に變りはない

一の富どこかの者が取りは取り

これも當世流行の懸賞募集などによくあるやッである

恐れ入りましたと琴をかたづける

これを見ても、德川時代の家庭と社交は、今日の樣な殺風景のものでなくッて、矢張西洋流に其家の者が、宴會の席などでお客に望まれて琴を演奏したものである、此宴會の席で嫁が琴を彈く句はまだ澤山ある

侮ッて藝子合の手なしに彈き

合の手無しに彈く抔、今日の藝妓では尋常茶飯の事で、否寧ろ最初から三絃などは問題外であるのだ、ストライキ節や今頃は半七サン的の淺黄裏計だから、實に話せないこと夥しい、此の句に對しても、いかにも江戸人種が音樂に耳のあつたことも知れるのである、ソして家庭の祝宴に花嫁が琴を彈いて興を添へる抔、いかにも嬉しいではないか、今日の紳士は勿論、文學趣味を解する青年でも、音樂となると皆聾で、分けて酒宴の席で琴などを彈かうものなら、大欠伸か無遠慮に隣の者と話し出して、一向平氣である、余は毎々此實際に遭遇してゐるので、今の紳士や青年抔のいかにも趣味の墮落してゐるのを慨歎する一人である

お内義の受取發句かいたやう

これは何でもない句だが、一寸面白く思はれる、昔は婦人は大低御家流の文字を習ッたもので、余の外祖母なども八十以上まで生存したが、書は殊に堪能であつた、これで昔しの婦人の御家流の上手が推察せられ

るが、母なぞの半切れへ書いた受取狀を見ると、いつも此句の感が生じる、今では鵞堂流や正臣流だから

お奥樣の受取色紙かいたやう

とでも申すのであらう

銀烟管銀のやうだと親父いひ

昔しの質素なことが知れる、いかに銀の貴かつたであらう、多くは銀烟管でなくて銀鍍金の烟管で滿足したであらう、ソレを放蕩息子が贅澤に銀烟管を造らへたのを、親父はまだ銀鍍金の烟管と半ば信じてゐるので、滑稽が生じるのである、『銀烟管落した噂三度聞き』も此時代の樣が知れる、今では銀なぞいふ下等なものは、下女ですら指環にするを耻ぢてゐる

八兵衛は女おシナは男なり

八兵衛は千葉縣下の娼妓の一名、おシナはお信濃で信州から米搗男が

出てくると相場が定まッてゐた、其信州頗る大食漢であッたもので、江戸では大食の者をおシナと呼んで嘲けッた『喰ふ外に信濃惡る氣の無い男』

まだ此外に芝居の『火繩賣』とか、町家へ押賣する錢の『サシ賣り』又は大阪で所謂盆屋的の『出合茶屋』だの、墮胎の『仲條』だの、ソレから當世にはない『鏡研ぎ』や、小間物屋の荷を背負ッて屋敷廻りをするものや、『四ッ手駕籠』『猪牙船』乃至は四ッ目屋の『長命丸』『帆柱』の末に至るまで、皆此川柳によッて當時社會の半面と暗面を知ることが出來る

これらの事は『川柳難句評釋』の著者某君なぞに、十分骨を折ッて貰らひたいものと思ふて居る

十六、川柳の革新

今日我國の文學中、小說は夙に坪內逍遙氏に依ッて、勸善懲惡主義の固陋なる非文學的範圍を脫し、優に明治の小說なる者を確立したではな

いか、續いて韻文界では故正岡子規氏が多年研鑽せられた俳句は、今や月並派を剿討して、明治の文學的俳句は爛絢の現境に達してゐる、尙固陋頑冥なりとして社會の一部に蟄居して居た短歌すらも、正岡子規氏一たび革新の氣運を皷しては、其以前から萠してゐた竹柏園、新詩社、雷會等の諸派相踵いで奮起せしには非らざる乎、而して由來滑稽を侮視し易き文壇は、まだ一人の立つて狂歌狂句の方面に改革を叫ぶものがない、蓋しこれを非文學的として排斥するか、又は滑稽は馬鹿々々しき下等な者と誤解してゐるのであらうか、ソレとも滑稽なるものは、一番に天才を要するもので、徒らに學んで到るべきものでないから、其まゝに捨て置かれるのであらうか、他の韻文の革新せらるゝ今日、獨り此方面は實に詩的の曙光にも達しないのである、今の文學者で多少此方面に近い所まで着眼せられてゐるのは、先輩に福本日南氏、藤井紫影氏、佐藤紅綠氏、石橋思案氏、靑柳有美氏等で、後進には依田秋圃、川上三槐二氏

滑稽短歌や滑稽俳句俗諺通其他に志されるので、未だ十分川柳や狂歌に向ッて、革新を絶叫されたことはないのである日南[illegible]で、あるから狂歌や狂句は矢張り絶對的に非文學で、戯作者の殘黨や講談師などの手に握られてゐるのである、故に彼等は徒らに惡謔と緣語とを以て唯一の生命とし、人をしてこゝに引證するをだに耻ぢしむるが如き駄句を以て今に其餘命を繫ぐには非らざる乎、而して其非文學的なる忠孝主義の惡句を以て高尚なりと心得たるにはあらずや然れ共これらの非文學的人士に、其詩的なるを望むは、固より鬼に念佛馬耳東風の類のみである、故に余が希待する所のものは、一に文學の何ものたるを解しうる青年に、其研究を望むのである、彼の天明の時代、和歌といひ俳句といひ狂歌といひ狂句といひ、皆悉く發達して遺憾なかりしが如く、明治の新狂句も亦他の韻文と伴ッて發達せねばならぬとおもふのである

ソレ故に、余は此川柳なる者をして、よく寶暦明和安永天明の昔に復活せしめ、更に一歩を進めて明治の新狂句を作り出すに務めたいのである

世の小説家でも材料は極めて狹隘で、其見聞の狹い所もあるであらうが、兎角甘たるい戀愛小説がいつも繰返されて、一向に社會の汎くへ亘るとが無いのである、丁度後世の川柳が、何でも猥褻であれば可と心得、拙劣な淫語を繰返すのに比しいものであるが、サテ世間は廣いもので、其尤弱點とする色慾の點にのみは、いつも迷溺するものと見えるが、詩の上から云ッても、材料の範圍の狹いのは決して喜ぶべき點でない、中にも此點に注意してゐるらしいのは小説家で内田魯庵氏で、其『社會百面相』は、小説とは云ひ憎いけれど、確かに我が川柳に近いものである、其材料も、學生、貧書生、勞働問題、官吏、新聞記者、教師、精神家、教育家、新學士、新高等官、温泉、閨閥、貴夫人、新細君、女學者、新詩人、ハイカラ紳士、宗教家、獵官、

代議士、虚業家、失意政事家、老俗吏、古物家、老作者、變哲家、時代精神等皆一に川柳の材料ならざるなく、取ッて以ッて我が新川柳の崛起すべき地に非らざる無しである、此點に於いて一番に發達すべき川柳の、萎靡振はず、徒らに小新聞の淺薄なる時事狂句にのみ安んずるやうでは、何とも浩歎の外はないのである、アヽ社會の小百面相たる新川柳の隆盛を致すは、果して何の日にあるだらう

江戸ッ子的青年文士も世には少なくあるまい、何とイチヤッキ文學の輸入元なる贅六青年文士をして、幅を戀愛文學アメンボー文學に利かしむるや、一ッこゝ大に江戸ッ子一流のベランメー文學を研究して、芋堀書生や釜追學生、トロ〳〵連小僧にニキビ黨抔を頭からヘコまして仕舞うのに限るのである、又地方出の文士にも大に江戸ッ子がる人もまゝ見受くるのだが、其江戸ッ子がるのは至極賛成だが、ならうことなら一ッ江戸生粋の文學たる此川柳をやッて貰らいたいものである、ソ

レ計でなく此川柳は短歌や俳句のやうに窮屈な規則のあるものでないから、普通社會の人が一の娯樂として研究するに値するもので、誰れにもよく趣味を理解し易いものであるから、是非文學的な川柳は大に流行させて見たいものである

ソレで今の文壇(計りでないが)の弊風として、徒らに人を中傷したり讒誣したり、其極になると其人を井戸へッキ落して從つて石を投込むやうな弊が見える、是等の弊も一度び川柳の流行するを見るに至ッたなら、人々其滑稽化し茶化し飛ばす妙を知るに至ッたなら、少しくはヤマルであらうと思ふ、何しろ今の文壇のやうに、かう蠻的精神が横溢しては溜らない、どうしても一度び川柳化して終まはねばならぬのだ

初心の中は、兎角腋の下から手を入れてクスグルやうな滑稽を喜び、淡泊な高尚な洒落とか滑稽とかを喜ばぬもので、ソして其滑稽を馬鹿にする弊がある、余も少年の頃は

馬鹿息子戒名忘れ南無親父

などの俗惡な句を喜んでゐた、今時見れば實にお話にもならぬのであるふ

何しろ滑稽の趣味を理解するには、其人格極めて謹直であるか、嚴格であるかで無くては、決して至妙な滑稽を語るに足りない、兎角世間の滑稽を語るものは、其人格多くは野卑であるから(落語家の如きもの)其滑稽は極めて淺薄なものが多い、故に人からも輕侮を招くので、眞の滑稽はコンナものではない、確かに俗界に超出して摯實な精神を有する人でなくては、滑稽の詩神は宿らないものである

と云ふと話がムツケ敷くなるが、平賀源内や蜀山人を見ても、其人格決して俗惡な者では無いのは知れるであらう、何でも粹も甘いも嚙分け學問も造詣する所がある人でなければ其滑稽多くは、無意識の凡俗に終はるものである、此點から云ふと、滑稽の趣味が我文壇に缺乏してゐ

るのも、其原因はよく知れてゐる

故に吾が川柳はニキビ黨やアメンボー文士に容れられざるを憂へないので、少しく具眼の君子に破顔さるれば十分滿足である、所で余は此尤重んずべき眞面目な滑稽詩を捧げて、滿天下の摯實なる青年に呈するのである

川柳の名稱いまだ一定してゐぬのは遺憾である、或人は狂句と呼び、或人は前句と呼んでゐる、近頃『日本』では評句の名を下した人があるが、語呂はわるいが、一寸面白く感じられた、川柳と云ふのが穩かであるが、ソレでは俳句の事を芭蕉と呼び、短歌を人丸と呼ぶやうなもので、何となく滑稽の感がする、何か適當な新名稱の起るまでは、余は多く川柳の名を用ゐて置く

十七、滑稽と惡謔及び結論

詩に曰く善く戲謔すれども虐を爲さずと、これ滑稽詩を作くる第一要

訣である、滑稽の太だ容易なるが如くにして、其實は太だ容易ならざるものは、其不爲虐の點にあるからである、何事でも七分三分の兼合ひといふことは要訣である如く、此滑稽に於いて一番愼まねばならぬ點で、前々から繰返して注意を仰いだ故である、彼の下手な落語家や幇間の滑稽が甚だシツヽコクして、人をして不快の念を生せしむるものは、全く此惡謔から生じる一大缺點と云はねばならぬ、ソシて彼等の惡謔的滑稽は似て非なる滑稽で、眞の滑稽とは殆ど其性質を殊にするものと云ふてもよいのである

ソレであるから、余は多年斯自然なる滑稽を唱道して、多少世の青年間にも流行させたいと思つてゐる、が、兎角趣味の低い者は、彼の惡フザケなる惡謔を好んで、高尚な滑稽になると一向無感覺であるは歎かはしい至であると思ふ

初代川柳時代の狂句が、文學的であッて、後世の狂句が非文學的に陷ッ

たのも、斯自然に可笑味ある問題を捉へないで、無暗に滑稽を製造せんとして、失敗したものである、滑稽は須らく自然なるべし、惡フザケを爲すべからずである

ソレから罵倒的川柳の方面に於いても、皮肉を穿つといふ位に止めて、決して車夫馬丁流の馬鹿野郎糞ダワケ的の惡口を用ゆるは尤下劣なるものと云はねばならぬ、尤も所と場合とに依ッては罵倒の大に振ふこともあるが、ソレは中々千番に一番のものであッて、決してザラに成功するものではない、吾が奇警なる川柳氏は、人を罵り世を罵るにも左樣な拙劣な手段は取らぬので、克く敵の皮肉を刺して、巧妙なる手腕を弄するものである、堅く云へば諷刺の妙を極むるものである

滑稽の世界、滑稽の功德は洵に廣大無邊のもので、福本日南先生の如き嚴格なる方も、此滑稽趣味を好まれて、常に云はれるには、滑稽の妙は、いかなる大惡人でも大姦雄でも、一度滑稽のふるひにかけられると悉く

滑稽無毒なものと爲ッて、更に人をして惡感を與へない點にあるので、外國の新聞雜誌には此諷刺の妙を極めたものが多い、ソレに佛國の大家モリエルの如き、尤滑稽の才に富んでゐた、彼の『夏小袖』を以て邦人に紹介された如き、作物が多いとのお話であッた、いかにも同感の至りで、此僞善流行の世の中、嫉妬怨恨中傷讒陷の修羅場なる社會には、どうしても此滑稽の趣味を理解させて、其弊害を矯める必要を見るのである」ソレでも一ッ云ひたいのは、今の文壇では互に衒學の競爭で、やれゴルキーの何主義だの、モッパサンの何だのと、ニーチェも擔ぎくたびれたと思ふと忽ち、種々な變り物の赤髯を擔ぎ廻まはつて、お互に其學殖の深さうなのを誇り合ッてゐる、とんと小供が樽天王を擔ぐやうな感じもする、が、吾敬愛する川柳壇場には、赤裸々たる天才を要するの外、一向にコンナ附燒刃の學殖を必要とは認めない、寧ろ大なる荷厄介であるのだ、ソレ故に初代川柳は

一我等無學不才の者故、故事古句存不申候

とある、いかにも謙讓した言葉であるが、其中大なる抱負を見ることが出來る、尤云ッた御當人は只正直に有儘お斷りに及ばれたのであらうが、ソコに難有味のある所で、下手な學力があつては、決して川柳の完全を望むことが出來なかッたので、其無學不才なる天才川柳氏の力に依ッて、此文學的滑稽詩は今日に其光を放つことが出來たものと云はねばならぬのである、ソコであるから、此滑稽詩場にあッては、ゴルキーが屁を放ッても、モッパサンが泣いたッて隣りのおんばさんの泣聲程にも感じないのである、要は只縱横に奇警の才を應用すれば能事足れりである、文壇に何町の樽天王が通らうとも、急に丸善へ驅け付けて、新着物をヒド算段で買ッたり、字引と首曳きで隣のジョンさんへ質問に出かける世話もないのである

滑稽の天地は、桃花流水別に人間に非らざるの日月がある、古に稱す、笑

ふ門には福來ると、余は摯實謹嚴なる世の青年諸君と此笑堂に握手して、福聚の餘慶に浴したいものであると祈るの外はないのである

文藝叢書 川柳梗概 終

附錄

猫家内喜

原稿紙三枚目書いて一服し
正直に籠目へ書くは初心なり
ニキビ黨釣つて喰ふのに屈托し
面を見て二度吃驚は女記者
寅の年金港堂は大施餓鬼
御多分に洩れまいとチビ起稿する
貸家にもならぬ大家がたんとゐる
大家中家小家同じく先生ぶり
小家連裏面暗面矢鱈書き
小文士鈍帳役者と云ふ如し

一頁二圓が文士行き留り
批評家は作者いぢめで飯を喰ひ
女作家は亭主を尻に敷く女
一頁左樣一圓からあると云ひ
足元を見られた文士あはれなり
雜誌屋の萬引ケチな盜人
雜誌屋で覗いて雜誌通をふり
雜誌屋の小僧アイッが又と云ひ
買ッてから三日と讀者持つて居ず
古本屋發賣禁止などすゝめ
貸本屋新刊物で目を廻はし
貸本屋口繪がなくちや駄目といひ
中學の生徒本屋の一得意

四ッ目舍の大人長命記なども書き
店頭でペラ〳〵〳〵と見る早さ
ヘボ文士又來おッたと山の靈
山で喰うのは木樵と文士なり
此時白霧溟濛として抔とかき
旅行書き木賃の虱しよッてくる
南谿は飛脚屋文學の泰斗也
木登りがやむと山登り矢鱈する
孃樣は大磯通を兎角ふり
泳げますか抔とハイカラ側へ寄り
お姫ィ樣曳網なども一寸ひき
引く波を逐かけて見て又逐はれ
お姫ィ樣一澁ひいて强くなり

借金のハイカラー付けた紳士なり
ハイカラー兎角横眼が上手なり
ハイカラー和服の時も猪首なり
香水の匂ひを先にハイカラー
ハイカラー巴里々々を茶漬にし
ハイカラー、ヌーボー式の幇間なり
ハイカラー鶴の歩むにさも似たり
ハイカラの病色男氣取なり
ハイカラー腰から曲けてお辭儀をし
ハイカラーの中から黒い顔が生(は)え
ハイカラー獄門といふ面(つら)ッつき
車中内顧せずとはハイカラー
文學士もてるは本屋計なり

文學士では喰へぬからと破談なり
子を持ッて文學士の迂を悟り
醫學士になッたものをと文學士
文學士兎角家内にもめが出來
てんなのがゐたのか知らの文學士
半年は氣焔で暮らす新學士
見てくれと云はぬ計りの新學士
新學士矢鱈肩書ふりまわし
新學士蹈鞴などひねりあげ
新學士髯の生えたを自慢にし
法學士財婚宗の信徒なり
法學士細君多くいはくもの
法學士寄ると觸ると議論をし

法學士參事官をばねらふなり

法學士新婚以來馬車に乘り

法學士持參の多少計算し

法學士嬶アの腔でヤッと喰ひ

學校出姑と絶えずいがみ合ひ

學校出赤堀流で飯事し

其當座細君の顏で飯を喰ひ

學校出亭主にボロを下げさせる

○花嫁の料理臺所大騷ぎ

煮燗を澄ましたもので客に出し

サンドウヰッチ妻が自慢だ喰ひ給へ

妻が繪を見てくれろには友弱り

其當座只ニッコ〳〵

新世帶チョコレートなど先づすゝめ

新世帶あらよくッてよを絶えず聞き

新世帶イチヤッキ歌が矢鱈出來

御茶ッピイ家庭の風味などを說き

新世帶一夫一婦をよく守り

新世帶ねびさせ給ふお物いひ

其當座必ず時計を氣にして見

新世帶當分友へ疎遠なり

ヘルメットト以來紳士は持餘し

おッ母チヤン郵便屋がのとヘルメット

郵便屋と又呼ばれたと紳士いひ

文壇は毛唐のあふれ者が好き

露國のゴロッキー一朝にして大家なり

ゴルキーだモッパサンだと毛唐通
丸善へ車急げと下知をする
格言に困る時にはナポレチン
獨逸語を汝知れりやと知らぬ奴
マキヲシム、ゴロッキーなど下女覺え
一犬の批評家吼えて萬犬吼え
ゴルキーは烟草の名サときいたやつ
呆きれたよ御覽なさいと三頁
面白いヤラカセ抔と記きなぐり
三頁開いて良人はまあ〳〵
新聞屋ふてえやつだは懲りたやつ

附錄

終

明治三十六年九月十八日印刷
明治三十六年九月廿二日發行

文藝叢書　川柳梗概
定價金參拾錢

著作者　阪井久良岐
發行兼印刷者　金港堂書籍株式會社　東京市日本橋區本町三丁目十七番地
代表者　右社長　原亮一郎　東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地
印刷所　合資會社　東京國文社　東京市京橋區宗十郎町十五番地
賣捌所　各府縣特約販賣所

不許複製

◉氣焰錄　登張竹風氏著　定價金參拾五錢

◉北州考及端唄評釋　如電、醒雪氏作　定價金拾五錢

◉狂歌梗概　菅髑髏氏著　定價金拾八錢

◉芭蕉論稿　佐藤紅綠氏著　定價金參拾五錢

◉さゝやき　藤澤古雪氏著　定價金貳拾五錢

◉布衣の一生　矢野蒼浪氏著　定價金貳拾錢

◉詩人ハイネ　橋本忠夫氏著　定價金四拾錢

と

95
11

終